

新茶屋遺跡

SHINCYAYA SITE

—宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2022. 3

合同会社 NEXT・FUTURE

盛岡市教育委員会

新茶屋遺跡

SHINCYAYA SITE

—宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2022. 3

合同会社 NEXT・FUTURE

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市山岸六丁目 46 番 1, 46 番 10, 60 番 1 地内に所在する新茶屋遺跡第 6 次発掘調査報告書である。本調査は、土地所有者である合同会社 NEXT・FUTURE と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき、盛岡市教育委員会（担当 盛岡市遺跡の学び館）が実施した。野外調査は令和 3 年 6 月 1 日から 8 月 31 日、図面・遺物整理は令和 4 年 2 月 28 日まで、原稿執筆作業及び収納作業は 3 月 28 日まで行われた。
- 2 本書の編集執筆は神原雄一郎、今松佑太、鈴木俊輝が担当し、菊地幸裕、津嶋知弘、今野公顕、花井正香、杉山一樹、佐々木あゆみ、室野秀文、浜谷佑が協力した。
- 3 遺構平面位置は、日本測地系を用い平面直角座標系 X 系を座標変換した調査座標で表示した。調査において遺構位置及び遺物出土位置を示すグリッドは、 $X - 30,000 \cdot Y + 29,000$ の交点を基点とし、基点より 50m 単位の大グリッドを A・B・C…X・Y と設定し、北から南へ 1・2・3…24・25 と付し、これらのアルファベット（大文字）とアラビア数字の組み合わせを大グリッドと呼称した。さらに大グリッドを 2m 単位の分割し、再びアルファベットとアラビア数字の組み合わせを用いた。
(例) $X - 30,000 \cdot Y + 29,000 \rightarrow A 1 - A 1$
- 4 高さは標高値をそのまま使用している。
- 5 土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
- 6 遺構記号は次のとおりとした。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴建物跡	RA	土 坑	RD	焼土遺構	RF
建 物 跡	RB	竪 穴	RE	配石・集石	RH
- 7 使用した地図は国土交通省国土地理院発行の 5 万分の 1 「盛岡」の地形図である。
- 8 図面整理及び遺物整理は細田幸美（拓本・遺構図作成）、佐々木富士子（遺物トレース）、図面作成及び出土遺物の実測は神原雄一郎が中心に行い、遺物写真撮影・編集は鈴木俊輝、今松佑太が行い、神原が総括した。
- 9 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。
- 10 本調査の一部については速報展等で発表しているが、内容等については本書が優先する。

目次

例言	
目次	
遺物の表現について	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査方法	1
3. 調査体制	2
II 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 盛岡市内の地形・地質	4
3. 周辺の遺跡	7
4. これまでの調査	8
III 調査成果	10
1. 検出された遺構と遺物	10
2. 基本層位	10
3. 縄文時代の遺構と遺物	15
4. 遺物包含層出土土器	23
5. 遺物包含層出土石器	26
IV 総括	51
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	新茶屋遺跡の位置	3
第2図	地形の分類と周辺の遺跡	6
第3図	新茶屋遺跡 全体図	9
第4図	新茶屋遺跡第6次発掘調査全体図	12
第5図	調査区北～南東端土層断面図	13
第6図	調査区北～西端土層断面図	14
第7図	RA001 竪穴建物跡	15
第8図	RA001 竪穴建物跡出土遺物	17
第9図	RF009 石囲炉・RH001 配石	20
第10図	RD003～006 土坑・RF008 焼土	21
第11図	RD003～006 土坑・RF008・009・RH001 配石出土遺物	22
第12図	遺物包含層出土土器 (1)	28
第13図	遺物包含層出土土器 (2)	29
第14図	遺物包含層出土土器 (3)	30
第15図	遺物包含層出土土器 (4)	31
第16図	遺物包含層出土土器 (5)	32
第17図	遺物包含層出土土器 (6)	33
第18図	遺物包含層出土土器 (7)	34
第19図	遺物包含層出土土器 (8)	35
第20図	遺物包含層出土土器 (9)	36
第21図	遺物包含層出土土器 (10)	37

第 22 図	遺物包含層出土土器 (11).....	38
第 23 図	遺物包含層出土土器 (12).....	39
第 24 図	遺物包含層出土土器 (13).....	40
第 25 図	遺物包含層出土土器 (14).....	41
第 26 図	遺物包含層出土土器 (15).....	42
第 27 図	遺物包含層出土土器 (16).....	43
第 28 図	遺物包含層出土土器 (17).....	44
第 29 図	遺物包含層出土石器 (1).....	45
第 30 図	遺物包含層出土石器 (2).....	46
第 31 図	遺物包含層出土石器 (3).....	47
第 32 図	遺物包含層出土石器 (4).....	48
第 33 図	遺物包含層出土石器 (5).....	49
第 34 図	遺物包含層出土石器 (6).....	50

表目次

第 1 表	新茶屋遺跡発掘調査次数一覧	8
-------	---------------------	---

写真図版目次

第 1 図版	新茶屋遺跡 第 6 次調査区全景
第 2 図版	RA001 竪穴建物跡全景・土層堆積状況, RD003 土坑全景
第 3 図版	RD004・005・006 土坑全景
第 4 図版	RF008 焼土全景・RF008 焼土埋設土器, RF009 石囲炉全景
第 5 図版	RF009 石囲炉埋設土器, RH001 配石全景・RH001 配石検出状況
第 6 図版	調査区北東壁土層堆積状況, 遺物包含層 (IV b 層) 遺物出土状況, IV b 層早期土器尖底部出土状況
第 7 図版	RA001 竪穴建物跡, RD003・005 土坑, RF008 焼土・RF009 石囲炉, RH001 配石出土遺物
第 8 図版	遺物包含層出土遺物 (1)・(2)・(3)
第 9 図版	遺物包含層出土遺物 (4)・(5)・(6)
第 10 図版	遺物包含層出土遺物 (7)・(8)・(9)
第 11 図版	遺物包含層出土遺物 (10)・(11)・(12)
第 12 図版	遺物包含層出土遺物 (13)・(14)・(15)
第 13 図版	遺物包含層出土遺物 (16)・(17)・(18)
第 14 図版	遺物包含層出土遺物 (19)・(20)・(21)
第 15 図版	遺物包含層出土遺物 (22)・(23)・(24)
第 16 図版	遺物包含層出土遺物 (25)・(26)・(27)

遺物の表現について

(1) 土器……土器の区分は、縄文土器・弥生土器に大別した。

- a 縄文土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とした。
- b 挿図の土器の配列は出土層位・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- c 縄文土器で稜線・沈線は実線・破線で表し、陰影は表現していない。

(2) 石器

- a 剥片石器の縮小率は2/3，礫石器は1/2とした。
- b 石器の展開順序は，基本的に左側に表面（背面），中央に右側面，右側に裏面（腹面・主要剥離面）を配列し，必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。
- c 挿図の配列は出土層位順に配列し，さらに器種ごとにまとめ，配列した。
- d 剥片石器の摩擦痕は網目（スクリーントーン）で示し，礫石器の自然面はドットで示した。

(3) 土製品・石製品

- a いずれも縮小率を1/2とした。

(4) 挿図中の記号番号は遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) RA701 B層 → RA701 竪穴建物跡埋土B層より出土

(例) G6-A20 III層

↓ ↓ ↓

※1 ※2 ※3

※1 大グリッド……遺跡の全体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット，北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し，A6，C12など，両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り，北西隅を起点として西から東にA～Yのアルファベット，北から南に1～25のアラビア数字を付し，グリッド名は両方の組合せで表した。

※3 遺物の出土層位を示す。

11. 遺構の表現について

各遺構の平面図で，複数の遺構を同一図面に表示する場合，説明する遺構は実線で表し，重複遺構は一点鎖線で表し，掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

12. 遺跡範囲については，過去の調査成果と遺跡の地形，遺物の散布状況をもとにして，推定の範囲を表している。

I 調査経過

1 調査に至る経緯

本調査区は盛岡市山岸六丁目 46 番 1 外に位置する。当地は平成 24 年に第 4 次発掘調査として住宅建設及び店舗建設に先立つ試掘調査が実施されていた地点である。試掘調査では表土直下で縄文時代早期から後期にかけての土器片が検出され、検出面とした地層（黒褐色土）以下の地層にも古い時代の遺物が包含されていることが想定された。そのため、当地を改変する場合、本調査が必要であることを地権者に通知した。しかし、諸般の事情により開発計画は中止され、今回の調査まで牧草地として利用されていた。

令和 2 年度に合同会社 NEXT・FUTURE より 9 月 2 日付で発掘届が提出される。宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査に関する事前協議が持たれる。調査に関する費用や期間について協議した。

合同会社 NEXT・FUTURE（委託者）と盛岡市市教育委員会（受諾者）間で令和 3 年 6 月 1 日付で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を締結し、発掘調査は盛岡市教育委員会（担当 遺跡の学び館）が実施する運びとなった。調査期間は令和 3 年 6 月 1 日～8 月 31 日である。

2 調査方法

本調査は開発予定地（8,429.79 m²）のうち、平成 23 年度の第 4 次調査で遺構・遺物が確認された 2,019 m²を調査対象地とした。

検出作業は耕作土、現代の盛土を重機で除去し、試掘調査で確認されていた表土（耕作土）下の黒褐色土上面で行われた。検出作業の結果、全体的に過去の土地改変を受けていたことがわかり、重機及び手作業で改変を受けた箇所を除去した。

調査区は小グリッドで区割りし、グリッドに沿う土層観察用ベルトを設けた。層位に合わせて遺構・遺物の面的広がりを確認した結果、Ⅱ層とした黒褐色土層より縄文時代後期の遺構・遺物が確認され、地山と思われた褐色土層（Ⅲ層）下位より縄文時代早期の遺物包含層が確認された。最終面は褐色火山灰層上面（Ⅵ層）で、Ⅵ層上位の暗褐色土（Ⅴ層）まで精査を行った。

地形測量は最終面（Ⅵ層上面）で行い、遺構の記録は遣り方測量、平面実測、写真撮影で行った。記録写真撮影は 1000 万画素以上のデジタル一眼レフカメラを用いた。

3 調査体制

令和3年度調査体制（野外・室内整理・報告書刊行）

教育長	千葉仁一
教育部長	岡市和敏
教育次長	川原善弘

歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長	割船活彦
館長補佐	大森勉
文化財副主幹	菊地幸裕
文化財主査	津嶋知弘
	神原雄一郎（調査・整理作業担当）
	今野公顕
	花井正香
主任	杉浦雄治
文化財主事	鈴木俊輝（調査・整理作業担当）
	今松佑太（調査・整理作業担当）
	杉山一樹
文化財調査員	佐々木あゆみ
	室野秀文
	浜谷佑
	伊藤聡子
学芸調査員	樋下理沙
	千葉貴子

[発掘調査・室内整理作業] 及川亜矢子，及川京子，角田悟，菊地泰乃，佐々木富士子，佐藤美智子，高橋弘子，袴田英治，袴田千佳，平川悠樹，細田幸美

[地権者・調査協力] 合同会社NEXT・FUTURE 代表社員 佐々木 靖

[御指導・御助言]（五十音順・敬称略）

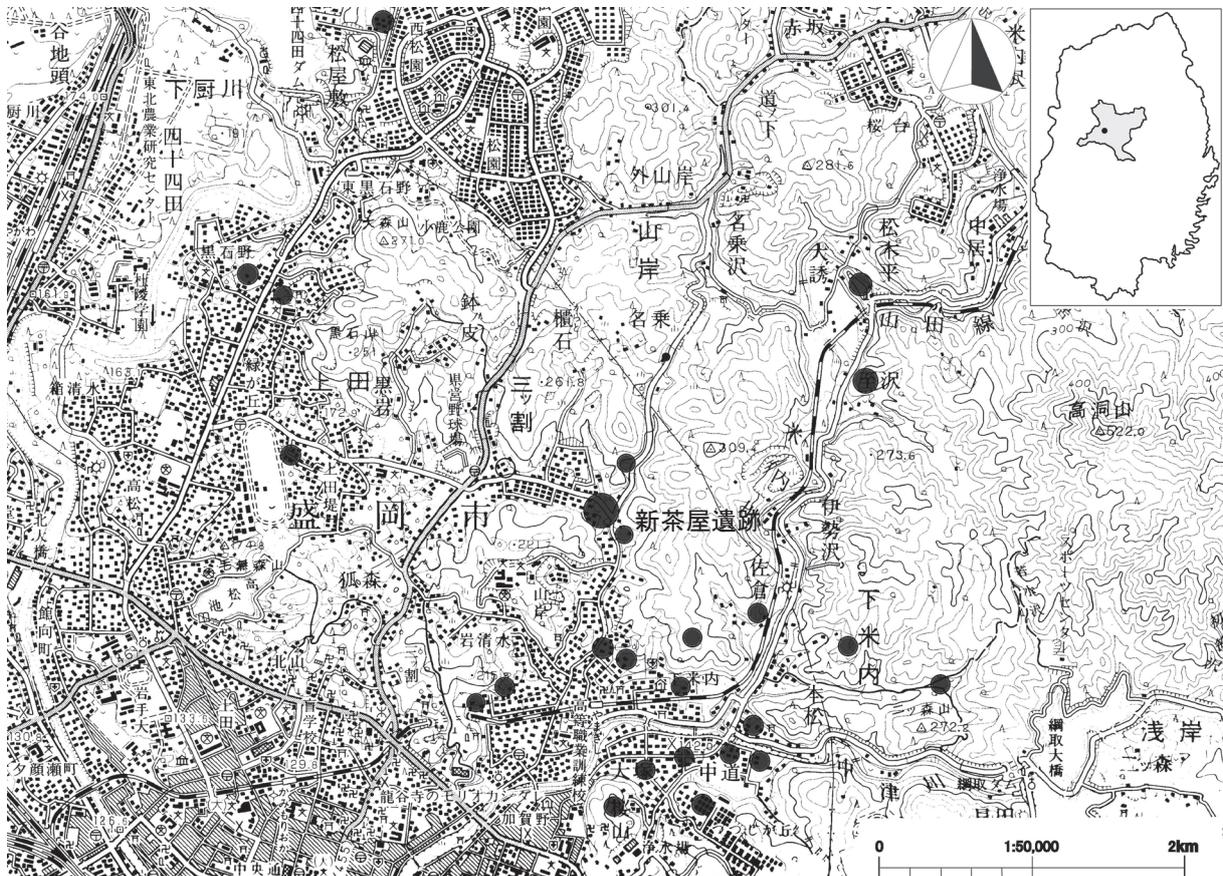
相原淳一（東北歴史博物館），小野章太郎（東北歴史博物館），小保内裕之（八戸市立博物館），菅野智則（東北大学），菊池強一，小林謙一（中央大学），高木晃（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター），武田良夫，千田和文（岩手県文化財愛護協会），星雅之（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター），八木勝枝（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター），八木光則（岩手大学）

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

位 置 岩手県盛岡市は、県土のほぼ中央部に位置する。北側を岩手町・葛巻町、東側を岩泉町・宮古市、南側を矢巾町、西側を八幡平市・滝沢市にそれぞれ接している。岩手県の県都として、人口約30万人、総面積約886.47km²に及ぶ規模である。

新茶屋遺跡はJR山田線 山岸駅から北に約1.5km、山岸六丁目及び山岸字名乗地内に所在する。遺跡南方の尾根向こうには、盛岡白百合学園があり、西方約1.0km、洞清水地内を抜けて三ッ割に至るところには、岩手県営野球場が所在している。遺跡全体の規模は東西約200m、南北約350m、標高約155～20mを測る。今回の第6次調査区は山岸六丁目46-1, 46-10, 60-1に位置する。現況は牧草地で、調査面積は2,019 m²（申請面積 8,429.79 m²）である。



第1図 新茶屋遺跡の位置 (1:50,000)

2 盛岡市内の地形・地質

概 観 盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れ、東に北上山地、西に奥羽山脈が連なる。この東西の山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、地形の様相は大きく異なる。また岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。盛岡市周辺は地質構造上、北上帯の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部が通り、北部北上帯と南部北上帯の双方を含む地域となっている。北部北上帯に属する山地では中起伏山地の外山山地、低起伏山地の玉山山地が位置し、南部北上帯に属する山地では、中起伏山地と小起伏山地の双方で構成されている手代森山地が位置する。その両者には含まれた早池峰構造帯に属する山地は先第三系からなる北上山地の西縁部にあたり、北上川の近くにまで迫り、高森山（626m）を中心とする高森山山地と、朝島山（607m）を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらにその西につづく大日向山山地、岩山（341m）や大森山（381m）を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成されている。

雫石川流域 盛岡市街および周辺地の平坦部の地形は大きくは3区分される。ひとつは北上川以西雫石川以北で、岩手山の火山活動に伴う火砕流堆積物からなる火山灰砂台地（滝沢台地）が形成され、沖積平野がほとんど発達していない地域である。滝沢台地南縁は沢により開析され、埋没谷が幾筋にも形成される。埋没谷に挟まれた台地縁辺部には多くの遺跡が立地しており、縄文時代草創期・早期を主体とした大新町遺跡、中期を主体とした大館町遺跡などが立地している。またひとつは北上川以西雫石川以南で、雫石川の影響による沖積段丘（砂礫段丘Ⅲ）が広がっており、奈良～平安時代の集落跡がみられ、9世紀初頭に造営された志波城跡も位置する地域である。

中津川・築川流域 北上川以東でその支流となる中津川・築川は建石山山地を開析しながら西流し、流域に発達した低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）・中位段丘（砂礫段丘Ⅱ）の地域は山地を出た地点から沖積段丘を形成するが、すぐに北上川と合流する。したがって一部を除き上～中位段丘（洪民火山灰層上部以上をのせる砂礫段丘Ⅰと分火山灰層をのせる砂礫段丘Ⅱ）があまり発達せず、小起伏山地・丘陵地Ⅱが低位段丘・氾濫平野と接している。本遺跡は建石山山地の西端部およびその縁辺部に発達した丘陵地・山麓緩斜面に立地し、その下方には中津川・築川で形成された広い低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）が形成されている。

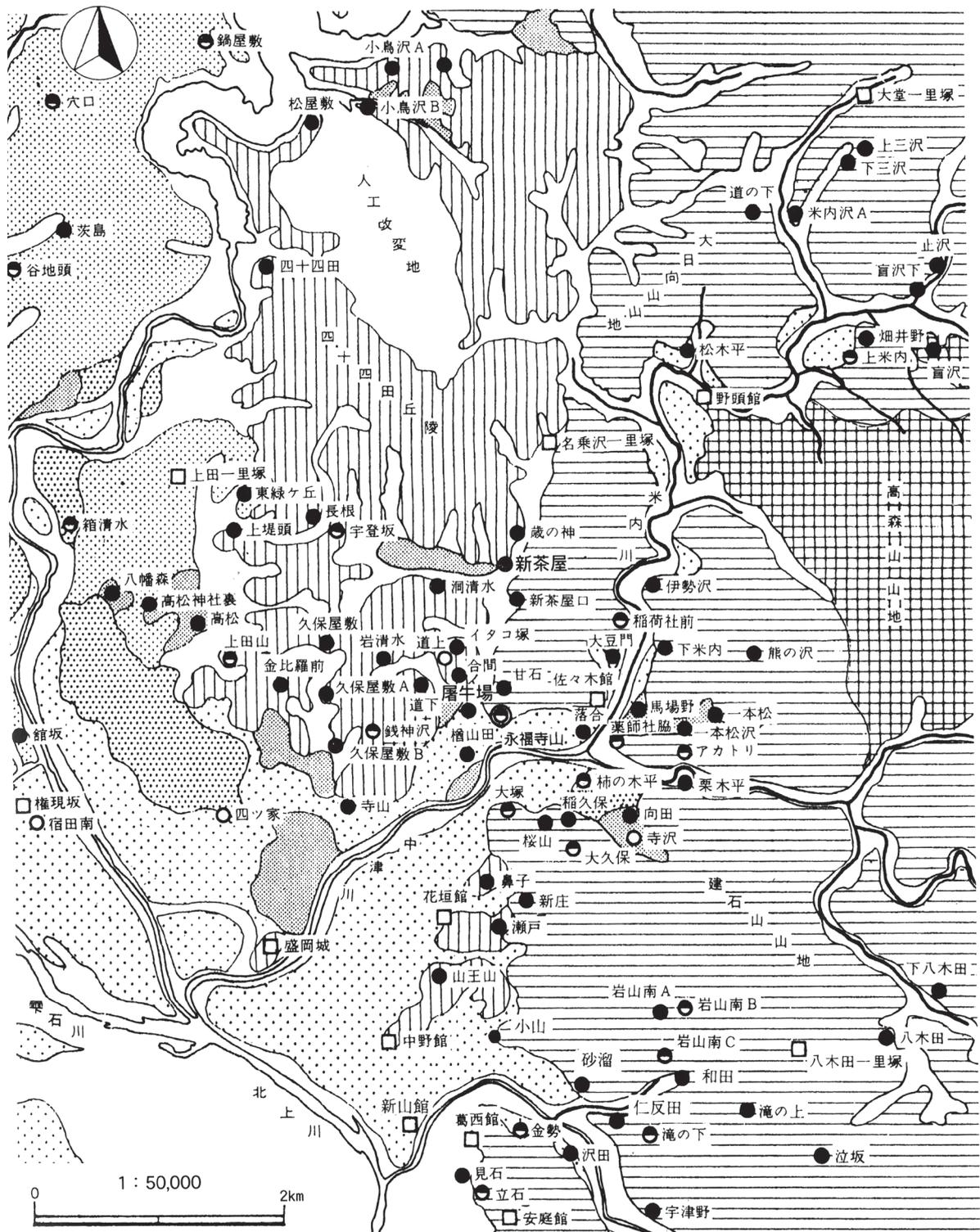
北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および変成岩・火成岩からなる。北上山地はその主要な境界である根田茂帯（早池峰構造帯）により、北部北上地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は根田茂帯の西縁にあたり、これらの山地縁辺には、中津川・梁川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川

と合流する。中津川と米内川の合流点付近には北西から帯状に分布する珪岩や蛇紋岩が露出しており、特に蛇紋岩帯を突き抜ける破砕帯には、蛇紋岩が熱水変成を受けて生成された滑石が産出する。米内川の源流を越え、北上山地の高原地帯となる外山地区では、幾筋もの沢によって丘陵地が開析され、その流れは丘陵間の低平地を埋め小規模な湿地を形成させる。外山地区では沢・湿地に沿う緩やかな斜面に遺跡が分布しており、当地域で最大規模であった湿地帯を改変して建設された岩洞湖湖畔には数多くの旧石器～平安時代遺跡が分布する。梁川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山（1,103m）の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

上記した河川の上流部には多様な岩石が露出しており、各河川では転石となった多くの岩石を見ることができる。先史期においても石器の材料として利用されていたものと思われる。築川上流域、中津川・米内川上流には蛇紋岩が分布し、中津川・米内川・乙部川上流域では玄武岩質の層状火砕岩が分布しており、上記した蛇紋岩類と共に磨製石斧や石製品の原材料として採取されていた可能性がある。また、築川の源流域付近には黒色の粘板岩が分布しており、転石となった粘板岩は築川流域各所で入手が可能で、粘板岩を加工した石器は築川流域の諸遺跡を中心に市内各遺跡で見ることが出来る。

奥羽山脈

奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川の水源地となる奥羽山脈には頁岩が豊富にあり、安山岩や凝灰岩など火山起源の岩石も豊富な地域である。これらの岩石は雫石川に転石となって容易に採取することが出来る。また、安山岩・凝灰岩帯では玉髄も産出し、滝沢市燧掘山では赤色の玉髄が大量に産出することで有名で、江戸時代より火打ち石の原料として採掘が行われていた。盛岡市内でも、燧掘山から連なる沼森山地南端にあたる繋付近より白色の玉髄が産出する。



- | | | | |
|---|--|---|-----------|
|  中起伏山地 |  扇状地および
崖錐性扇状地 |  砂礫段丘Ⅲ
(低位段丘) | ● 縄文時代 |
|  小起伏山地 |  火山灰砂地 |  谷底平野および
氾濫平野 | ● 縄文時代～古代 |
|  丘陵地Ⅰ |  砂礫段丘Ⅱ
(中位段丘) | | ○ 古代 |
| | | | □ 中世・近世 |

第2図 地形の分類と周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

屠牛場遺跡 新茶屋遺跡が所在する四十四田丘陵南端及び中津川・米内川流域には数多くの遺跡が分布している。

本遺跡の南方約1kmには、屠牛場遺跡が所在する。平成11年に個人住宅 建築に伴う発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代早期に帰属する竪穴1基、土坑1基、縄文時代早期以降に比定される土坑7基、ピット群が検出された。また、縄文時代早期、前期、弥生時代、続縄文時代の遺物包含層も検出されている。遺物包含層からは、縄文時代早期の沈線・貝殻文土器を主体に、前期初頭の千鶏Ⅱ式、弥生時代の赤穴式、続縄文時代の後北C2式の土器が出土している。特に沈線・貝殻文土器群は新茶屋遺跡で出土した土器と酷似しており、遺跡の在り方を考える上で重要である。

歳の神遺跡 本遺跡の北に接する歳の神遺跡では、個人住宅建設に伴う小規模な調査が昭和57年に行われ、縄文時代早期から弥生時代に至る遺物が出土している。主体となるのは縄文時代早期中葉と弥生時代前期の遺物で、遺構は確認されなかったが、遺物量から周辺に集落の存在が考えられた。

銭神沢遺跡 南に約1kmのJR山田線愛宕山隧道北東口付近に位置する銭神沢遺跡からは、縄文時代晩期の大洞C1式土器、弥生時代の天王山式及び赤穴式土器が確認されている。弥生時代の土器については日本考古学協会会員の武田良夫氏によって紹介されているほか、大形の鑿状石斧が採集されている（盛岡市遺跡の学び館蔵）。

永福寺山遺跡 本遺跡の南方約1.2kmには、永福寺山遺跡が所在する。昭和40～41にかけて3次にわたる発掘調査が行われた。縄文時代の竪穴住居跡、土坑、古墳時代の土坑墓等の遺構と、縄文時代中期の土器、古墳時代前期 塩釜式の土師器、弥生土器、続縄文土器、勾玉、鉄製鎌等の遺物が検出された。特筆されたのは、古墳時代の土坑墓から塩釜式土器と後北C2-D式土器が共伴して出土したことである。両者の並行関係については結論に至っていないが、当地域における古墳文化と続縄文文化の様相を解明するうえで重要な成果であった。

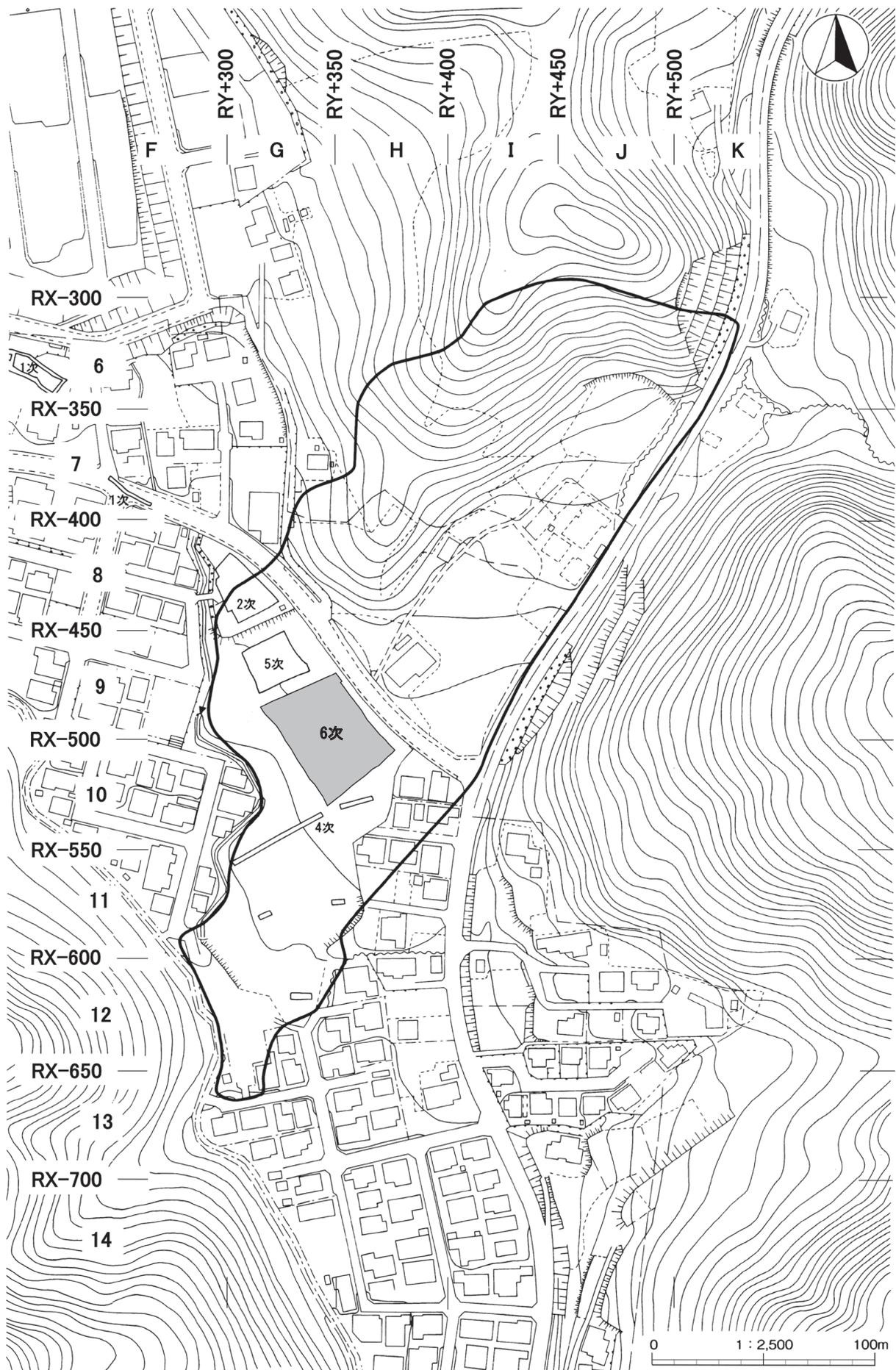
名乗坂一里塚 新茶屋遺跡の北東約1.0kmには、名乗坂一里塚がある。名乗坂一里塚は、小本街道筋に築かれたもので、現在では旧道東側の塚は湮滅し、西側の塚の一部が僅かに遺存しているのみである。小本街道は、奥州道中から分岐して、薮川、岩泉、小友などを経て、小本（現 岩泉町）へと通じる脇街道である。部分的に大きく異なる箇所もあるものの、概ね、現在の市道、県道岩泉線、国道455号線と一致、あるいはそれに沿っている。小本街道の変遷については、必ずしも明確にはなっていないが、正保4年の『南部領総絵図』や『通絵図』などによって道筋を確認することができるため、江戸時代初期には整備されていたと推測される。

4 これまでの調査

過去の調査 新茶屋遺跡はこれまでに、平成4年度の第1次調査から6次にわたる緊急発掘調査が行われている。その内、本格的な発掘調査が行われたのは第2・5・6次の調査で、遺跡を北西～南東に横断する道路の南側斜面部の調査が多い。遺構が確認されたのは第2・6次調査である。第2次調査は、山岸老人憩いの家建設に伴う調査で、平成6年に試掘調査を行い、平成7年に本調査を実施している。縄文時代早期の土坑と焼土遺構が検出され、遺物包含層から縄文時代早期中葉と前期初頭を主体とする土器・石器が出土している。特に縄文時代早期中葉の貝殻文系土器が多数出土した。第5次調査は、盛岡中央消防署山岸出張所庁舎建設に伴う調査で、平成25年に実施されている。第5次調査区は丘陵裾の谷底付近で、北西から南東に傾斜している。南北方向に旧流路が認められ、その箇所が落ち込む様相であった。遺物包含層から縄文時代早期中葉と前期初頭の土器・石器が出土しており、隣接する第2次調査と同様の遺物包含層が確認されている。特徴として、縄文時代早期の条痕文土器が割合を占め、千鶏Ⅰ式、長七谷地Ⅲ群、早稲田6類などと併行関係にある縄文時代前期初頭の土器が出土している。第4次調査は、住宅建築に先立つ試掘調査である。第3・5次調査地点の隣接地であり、調査の結果、第2・5次と同様の遺物包含層が検出され、今次調査の実施に至った（第1表）

第1表 新茶屋遺跡発掘調査次数一覧

次数	年度	調査方法	所在地	調査原因	面積(m ²)	調査期間	検出遺構・遺物
1	H4	試掘	山岸字洞清水 29 外	土地区画整理	70.5	H4.12.3～12.4	縄文土器 数点
2	H7	本調査	山岸六丁目 49-6	公共施設建設	531	H7.6.27～8.10	土坑・焼土遺構 (縄文早期)、 遺物包含層 (縄文早期～後期)
3	H23	試掘	山岸六丁目 46-11 外	消防庁舎建設	150	H23.11.15～11.16	遺物包含層 (縄文早期～前期・弥生)
4	H23	試掘	山岸六丁目 46-1 外	住宅建築	584	H23.11.15～11.18	遺物包含層(縄文早期～前期・後期・弥生)
5	H25	本調査	山岸六丁目 269-2	消防庁舎建設	481	H25.9.17～12.10	遺物包含層 (縄文早期～前期)
6	R3	本調査	山岸六丁目 46-1 外	宅地造成	2,019	R3.6.1～8.31	竪穴建物(縄文前期) 土坑、焼土遺構、配石遺構 遺物包含層(縄文時代早期～前期・後期・弥生)



第3図 新茶屋遺跡全体図 (1:2,500)

Ⅲ 調査成果

1 検出された遺構と遺物

遺 構 縄文時代前期初頭の竪穴建物跡が1棟(RA001竪穴建物跡), 縄文時代後期の土坑4基(RD003~006), 焼土遺構(炉)2基(RF008・009), 配石1基(RH001)が検出された。

RA001竪穴建物跡の床面直上B層より前期初頭の土器片が出土したことから構築時期は前期初頭と思われる。土坑及び焼土, 配石はⅡa層上面でプランが検出され, 埋土及び周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土することから縄文時代後期前葉の構築と思われる。なお, RF008・009の火床面には粗製深鉢が埋設されており, 竪穴建物の炉であったことが考えられる。しかし, 焼土周辺から壁・柱穴等が確認されなかったことから焼土遺構として扱った。

遺 物 縄文時代の遺物が調査区全域から出土する。縄文時代早期前葉の遺物はRA001の北, 標高160,200m付近より散発的に出土。縄文時代早期中葉の遺物は調査区北東・東辺付近に集中することから調査区北~北東部の小グリッドを掘り下げた結果, RA001周辺の標高160,000m付近に遺物が集中することが確認された。縄文時代前期初頭の遺物は調査区全域のⅡb層から散発的に出土する。縄文時代後期の遺物は調査区南東部に分布するRD003~006土坑, RH001配石周辺部より出土する。特にRH001配石周辺からの出土量が多く, 本来は遺構に伴う遺物であったことが思われる。

2 基本層位

堆積状況 第6次調査区は北東から南西に延びる扇状地上に位置する。扇状地の東縁には丘陵斜面が迫り, 斜面下には水量が多い沢(名乗沢)が流れる。新茶屋遺跡が立地する扇状地形はこの沢によって運ばれた土砂が堆積したことによって形成されたものと思われる(第3図)。

各層には角礫が数多く含まれ, 特にⅢb層には直径40cm以上の角礫も含まれる。

基本土層 I層… 黒褐色土を主体とする層で, a・b・c・d層の4層に細別される。Ia層は耕作土で, 黒褐色土・暗褐色土による混合土。軟らかく締まりのない層である。現代の生活用具等が混入する。Ib層は粉状の灰白色火山灰が粒状に含まれる。大部分が耕作等により削平・攪乱される。Ic層は塊~層状の灰白色火山灰が含まれる。Id層は小角礫を含み, 水分を多く含む層である。全体的に酸化鉄の沈殿が見られる。縄文時代各時期の磨滅した土器片が出土する。

Ⅱ層… a・b層の2層に細別され, 全体的にやや硬く締まる黒褐色土を主体とする層である。

Ⅱ a 層は黒～黒褐色を主体に、粒～塊状の黄褐色土を含む。微細な炭化物片が混入する。縄文時代後期以降の遺物が主体的に出土する。

Ⅱ b 層は黒褐色土を主体に塊～粒状の褐色火山灰、スコリア粒を含む。やや硬く締まり、土粒が細かく粉状に近い部分もある。上位より縄文時代前期初頭の遺物が集中する傾向があり、Ⅱ a 層との境界付近では前期初頭と後期前葉の遺物が混同して出土。

RD003～006, RH001, RF008・009はⅡ a 層中で検出された。

Ⅲ層… にぶい明黄褐色土、暗褐色土を主体に角礫、スコリア粒を多量に含む層である。角礫の混入量により a・b 層の 2 層に細分される。Ⅲ a 層は塊状の明黄褐色土と暗褐色土を主体に、多量のスコリア粒を含む。Ⅲ b 層は後述するが、角礫を多量に含む層で、全体的に粘質で硬く締まる。

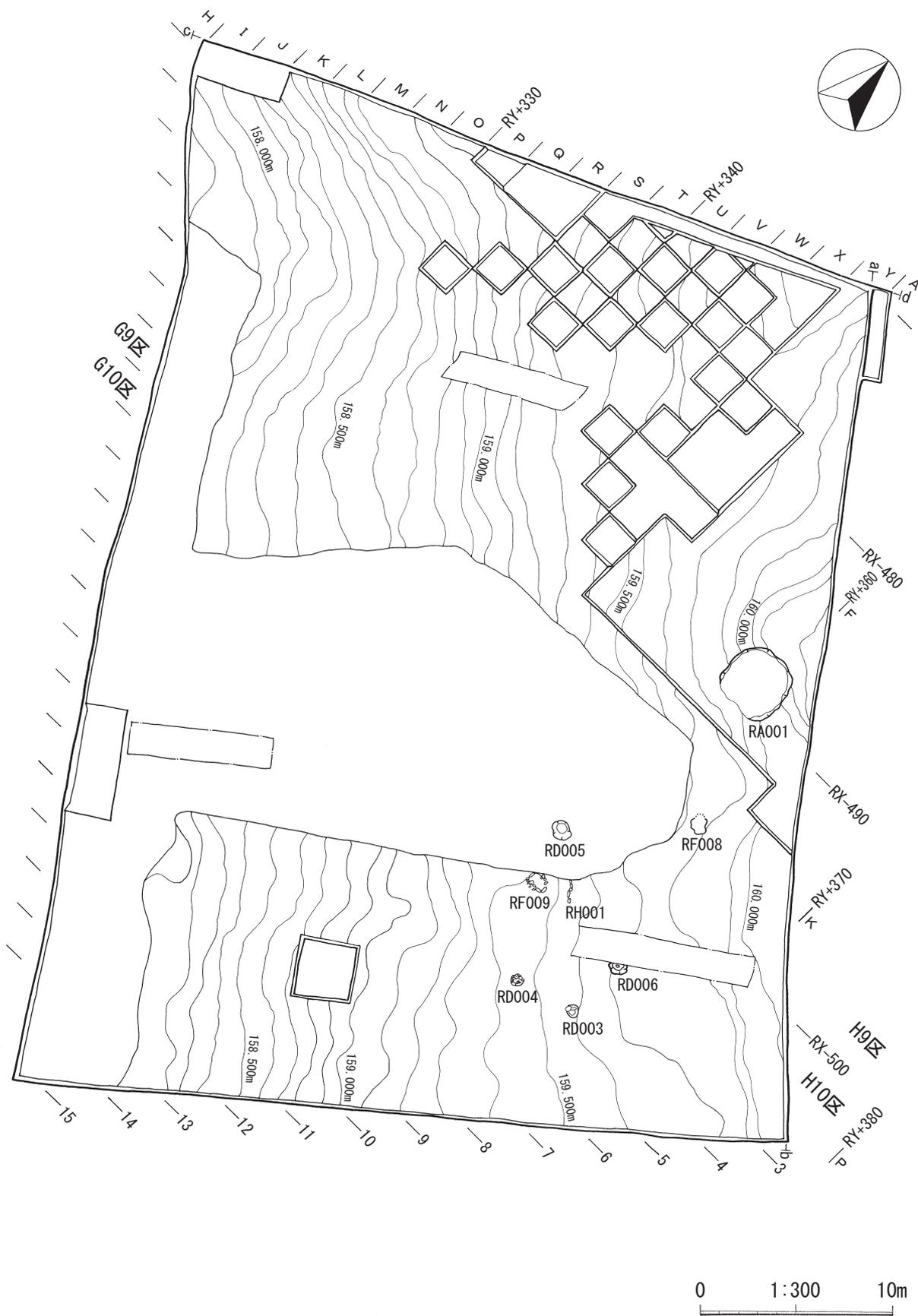
Ⅲ層は地形が窪む箇所や低地に堆積する層で、黒・暗褐色を呈する上下の層に対し、明黄褐色・褐色を呈し、角礫を多量に含むなど漸移的な堆積過程が窺えない。むしろ、上流からの突発的な土砂流入を思わせる層である。含有される角礫は蛇紋岩、珪岩、千枚岩など付近の岩盤を構成する岩石が主体的で、稀に人頭大の石英や方解石が含まれる。

このⅢ層を境に時期が異なり、Ⅲ層より上位からは早期後葉以降の遺物、下位から早期前葉から中葉にかけての遺物が出土する。

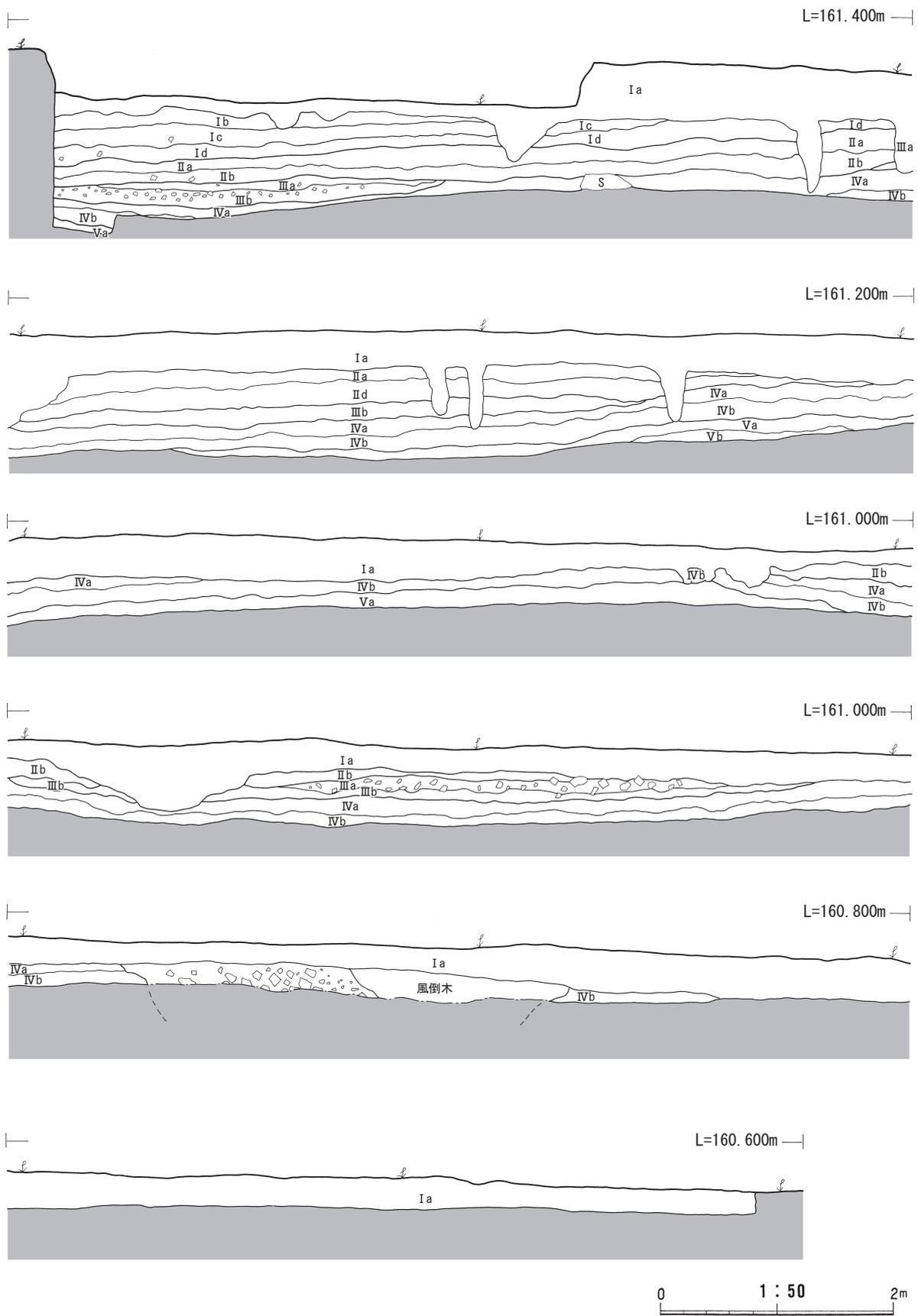
Ⅳ層… 暗褐色土を主体に、スコリア粒を含む硬く締まる層。スコリアの含有量から a・b の 2 層に細分される。Ⅳ a 層は全体的に粘質の少ない層であるが、Ⅳ b 層は粘質が強く、スコリア粒も多く含まれる。Ⅳ層全体から早期中葉の遺物が出土する。

Ⅴ層… 暗褐色土を主体に塊状の褐色土とスコリア粒を多く含む。全体的に硬く締まり、地山面としたⅥ層上面を覆うように堆積する。Ⅴ層中には上層からの遺物も少量混入するが、早期前葉の押型文が主体的に含まれる。

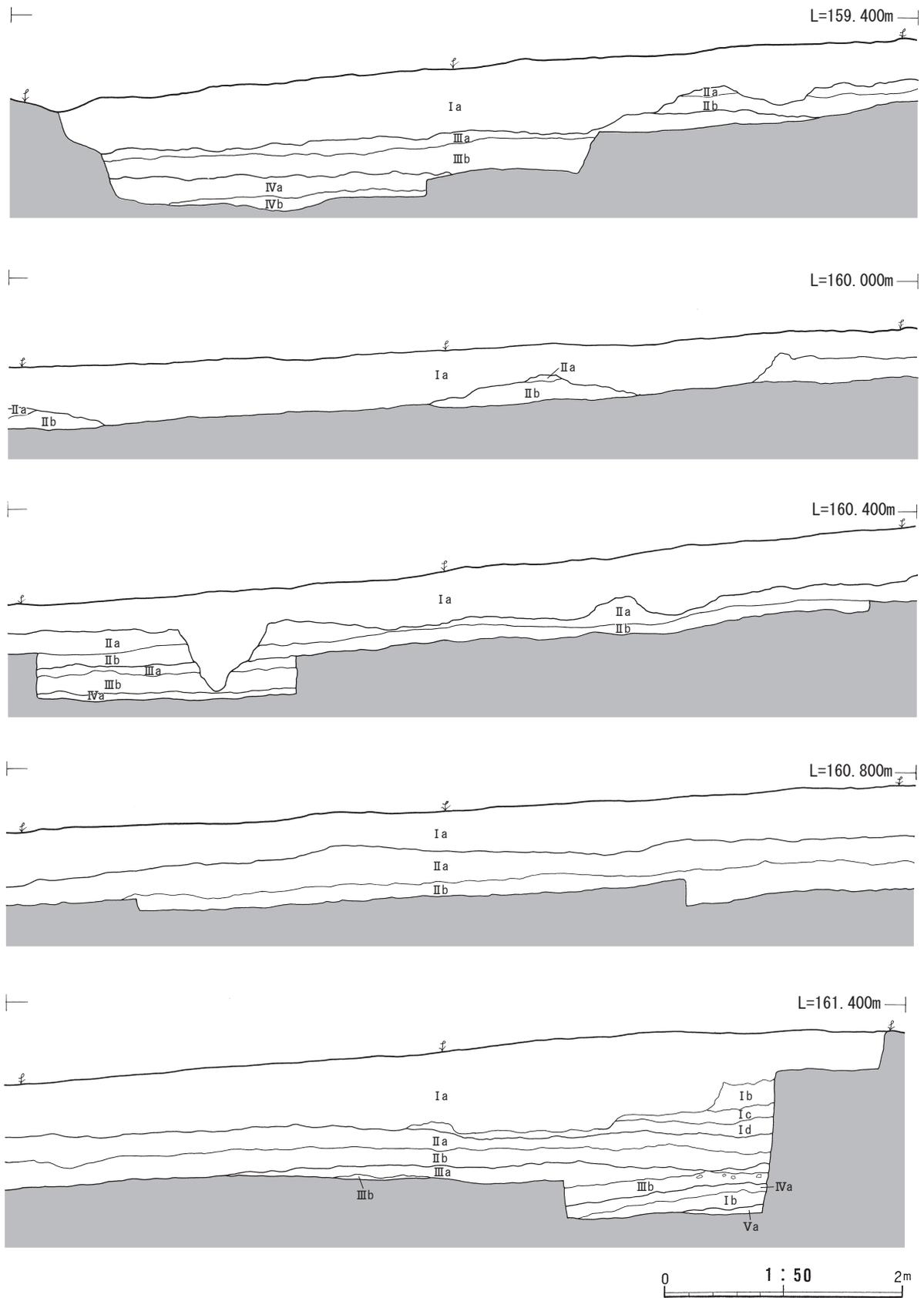
Ⅵ層… 粘性のある褐色土を主体とする層で、粗いスコリア粒が含まれる。全体的に硬く締まり、部分的ににぶい褐色に変色する。



第4図 新茶屋遺跡第6次発掘調査全体図 (1:300)



第5図 調査区北～南東端土層断面図 (1:50)

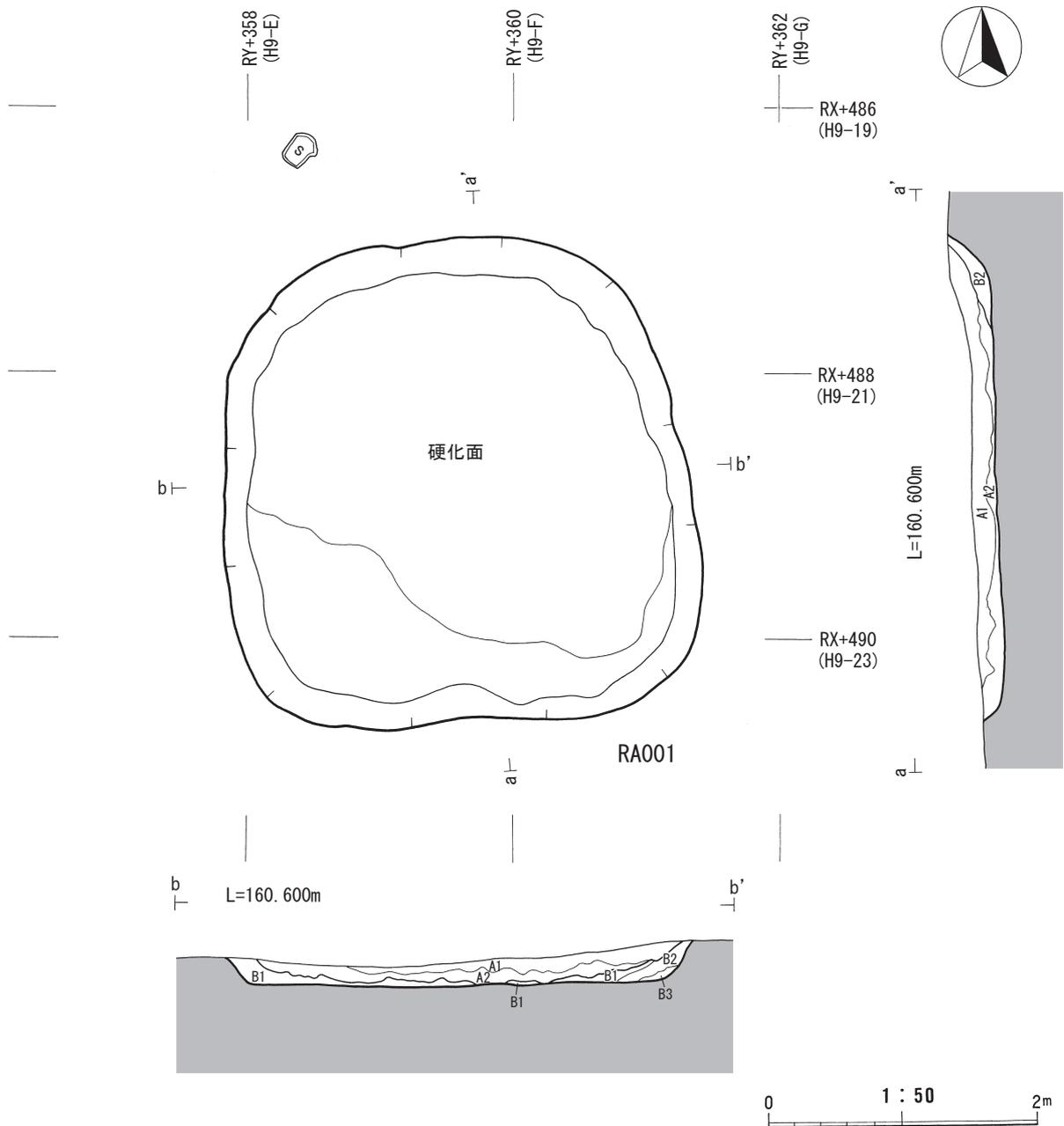


第6図 調査区北～西端土層断面図 (1:50)

3 縄文時代の遺構と遺物

RA001 竪穴建物跡 (第7・8図)

位置 調査区中央東部 検出面 IV a 層上面 掘込面 不明
 時期 縄文時代前期初頭 平面形 隅丸方形 重複関係 なし
 規模 南北上端 3.52m・下端 3.18m, 東西上端 3.54m・下端 3.03m 深さ 0.31m
 床面 床面はほぼ平坦で、南辺以外は硬い面が広がる。



第7図 RA001 竪穴建物跡

埋 土 A・B層に大別され、A層は2層・B層は3層に細別される。全体的に硬く締まり、削ると光沢を帯びる。

A層一 A1層は黒褐色土を主体に、塊～粒状の褐色火山灰、スコリア粒、焼土粒、炭化物片を少量含む。層相はⅡb層に近似する。

A2層は黒褐色土と塊状の暗褐色土が混合する層で、塊～粒状の褐色火山灰、スコリア粒、焼土粒、炭化物片を含む。

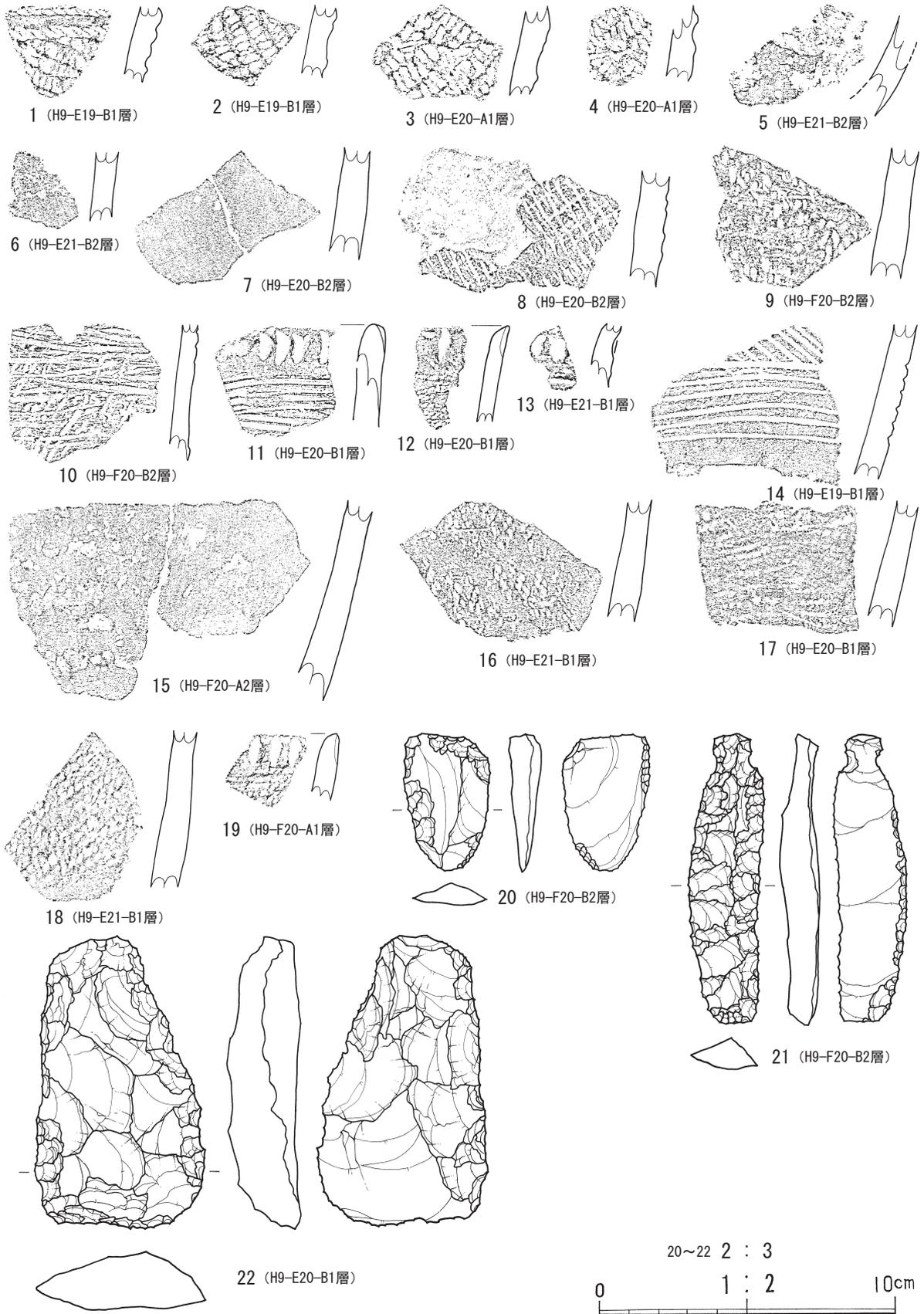
B層一 B層は3層に細分され、B1層は暗褐色土を主体に粒～塊状黒褐色土・黄褐色土を含む層。

B2層は黒褐色土を主体に塊状のにぶい黄褐色土を含む層。B3層はにぶい黄褐色土と粒から塊状の黒褐色土が混合する層である。各層に焼土粒・炭化物片を少量含む。

遺物出土状況 竪穴建物跡の周囲の遺物包含層から流入したものと思われる前期初頭（第8図1～4）、早期中葉（第8図5～19）の土器片、第8図20～22の剥片石器が出土した。

出土遺物(第8図1～22) 1～4は前期初頭の深鉢形土器で、器面には羽状縄文が施される。全て同一個体で、1の上部には原体圧痕が施される。胎土に繊維を微量含み、全体的に光沢を帯びる。5～7は早期中葉の尖底深鉢形土器底部付近の無文部である。8は細い単軸絡条体を左右斜位に施す深鉢体部片である。10～13は条痕を施す深鉢で、11～13は口縁部に刻目を施す。14は深鉢体部から底部にかけての部位で、沈線による斜位・横位平行線文を施す。9・16は直前段半撚RRLを横位、18は直前段半撚LLRを横位に施す深鉢体部片である。15・17・19は単軸絡条体を横位に施す深鉢で、19の口縁部には刻目が施される。なお、12・19の口縁部に施される刻目は僅かに引いた痕跡があり、短沈線と表現しても良い文様である。

20は削器と思われる頁岩製の石器で、縁辺を部分的に剥離調整する。21つまみ及び背面両側縁から入念に押圧剥離を施す縦刃の頁岩製石匙である。22は頁岩製の石筥で、全周縁より整形剥離が施される。



第8図 RA001建物跡出土遺物

R D O O 3 土坑 (第 10・11 図)

位置 調査区南東 H 10 - H 5 付近 検出面 II b 層上面 掘込面 II a 層

時期 縄文時代後期前葉 平面形 円形 重複関係 なし

規模 南北上端 0.78m・下端 0.63m, 東西上端 0.73m・下端 0.62m, 深さ 0.43m。

検出状況 土坑上面に 0.30m 前後の扁平礫が人為的に置かれる。

底面 ほぼ平坦。埋土 A 1・B 1 に分けられ, A 1 層は焼土粒・炭化物片を含む黒褐色土を主体とする。軟らかく締まりのない層。B 1 層は黒褐色土を主体に, 小塊状の暗褐色土を含む。やや硬く締まる層である

遺物 (第 11 図 3) 23 は器壁が筒状に直立する深鉢口縁部片である。器面には無節縄文を縦位に施す。

R D O O 4 土坑 (第 10・11 図)

位置 調査区南東 H 10 - G 5 付近 検出面 II b 層上面 掘込面 II a 層

時期 縄文時代後期前葉 平面形 楕円形 重複関係 なし

規模 南北上端 0.78m・下端 0.68m, 東西上端 0.49m・下端 0.32m, 深さ 0.23m。

検出状況 土坑上面に 0.20 ~ 0.10m の礫が B 1 層上面に人為的に置かれる。

底面 ほぼ平坦。埋土 R D O O 4 土坑とほぼ同様で, A 1・B 1 に分けられ, A 1 層は焼土粒・炭化物片を含む黒褐色土を主体とする。軟らかく締まりのない層。B 1 層は黒褐色土を主体に, 小塊状の暗褐色土を含む。やや硬く締まる層である

遺物 図示していないが, 縄文が施された土器小片が A 1 層より出土している。

R D O O 5 土坑 (第 10・11 図)

位置 調査区南東 H 10 - E 2 付近 検出面 III 層上面 掘込面 不明

時期 縄文時代後期前葉 平面形 不整円形 重複関係 なし

規模 南北上端 0.94m・下端 0.48m, 東西上端 1.02m・下端 0.62m, 深さ 0.31m。

検出状況 検出面より縄文時代後期の土器片が出土。

底面 ほぼ平坦であるが, 東側が落ち込む。埋土 A 1・B 1 に分けられ, A 1 層は粘性のある褐色土, 炭化物片を含む黒褐色土を主体とする。B 1 層は黒褐色土を主体に, 褐色土を含む。2 層共にやや硬く締まる層である

遺物 (第 11 図 24・31) 24 は深鉢体部から底部にかけての部位で, 器面には無節縄文を縦位に施す。31 は背面両側縁から押圧剥離を施す縦刃の頁岩製石匙である。

R D O O 6 土坑 (第 10・11 図)

位置 調査区南東 H 10 - H 3 付近 検出面 II b 層上面 掘込面 II a 層

時期 縄文時代後期前葉 平面形 不整楕円形 重複関係 なし

規模 南西 - 北東上端 0.92m・下端 0.18m, 北西 - 南東上端 0.58m 以上・下端 0.19m, 深さ 0.33m。

底面 中央部が落ち込む **埋土** A1・B1に分けられ、A1層は炭化物片を含む黒褐色土を主体とする。やや硬く締まる。B1層は硬く締まる黒褐色土層である。

遺物 なし

R F O O 8 焼土 (炉) (第 10・11 図)

位置 調査区南東 H9-G 24 付近 **検出面** II b 層上面 **掘込面** 不明

時期 縄文時代後期前葉 **平面形** 不整形 **重複関係** なし

規模 北西-南東上端 0.83m 以上, 南西-北東上端 0.72m

検出状況 表土下で検出。焼土は削平された状態で検出された。焼土南東部には深鉢下半部が斜位に埋設される。建物の炉と思われるが柱穴や壁等の付属遺構が検出されなかったため、焼土遺構とした。

焼土面 ほぼ平坦。焼土面中央北西-南東の長軸 0.69m・単軸 0.31m の範囲が強く火を受け明赤褐色に、その周囲がにぶい赤褐色に変色する。熱浸透厚は約 0.05m をはかる。埋設土器は熱で白色化しており、周囲に微破片が散乱する。

遺物 (第 11 図 25) 25 は埋設されていた深鉢で、体部下半から底部にかけての部位が認められる。底部以外は熱による変色、器面の剥離が著しい。器面には単節斜縄文が横位に施される。

R F O O 9 石囲炉 (第 9・11 図)

位置 調査区南東 H9-E 4 付近 **検出面** II b 層上面 **掘込面** 不明

時期 縄文時代後期前葉 **平面形** 不整形

重複関係 R H O O 1 配石と一連の遺構の可能性ある。 **規模** 北-南 0.97m, 西-東 0.97m

検出状況 II a 層中で検出。石囲部東の炉石上端は炉が構築された面よりも 0.19m 高く、R H O O 1 配石検出時に、配石の一部と思われた。火床面南西部に深鉢が正立で埋設されていた (第 11 図 26)。明確な柱穴や壁等の付属遺構が検出されなかったため、石囲炉のみの単独遺構とした。

焼土面 ほぼ平坦。石囲部内側のほぼ全面が強く火を受け硬化する。色調は明赤褐色を呈し (B1層)、焼土面上位には赤褐色の焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積する (A1層)。B1層下位の熱浸透厚は約 0.08m をはかる。

遺物 (第 11 図 26・32) 26 は炉南西部に正立して埋設されていた深鉢で、上部には横位の原体圧痕が施され、体部には単節斜縄文が横位・斜位に施される。埋設されていた深鉢で、体部下半から底部にかけての部位が認められる。底部以外は熱による変色、器面の剥離が著しい。器面には単節斜縄文が横位に施される。32 は安山岩製の敲石で下面には敲打による平坦面が表出される。

R H O O 1 配石 (第 9・11 図)

位置 調査区南東 H9-F 3 付近 **検出面** II b 層上面 **構築面** II b 層上面

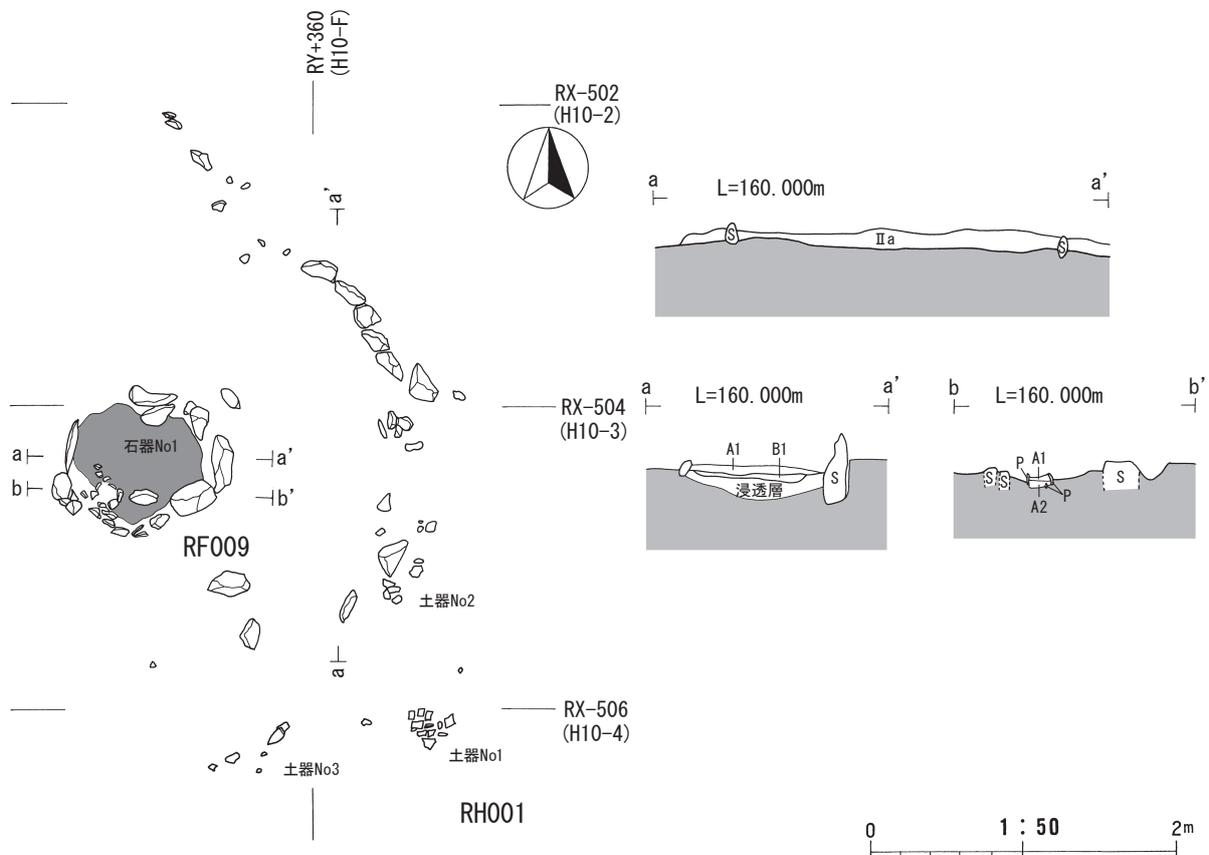
時期 縄文時代後期前葉 **平面形** 不整形

重複関係 R F O O 9 配石と一連の遺構の可能性ある。

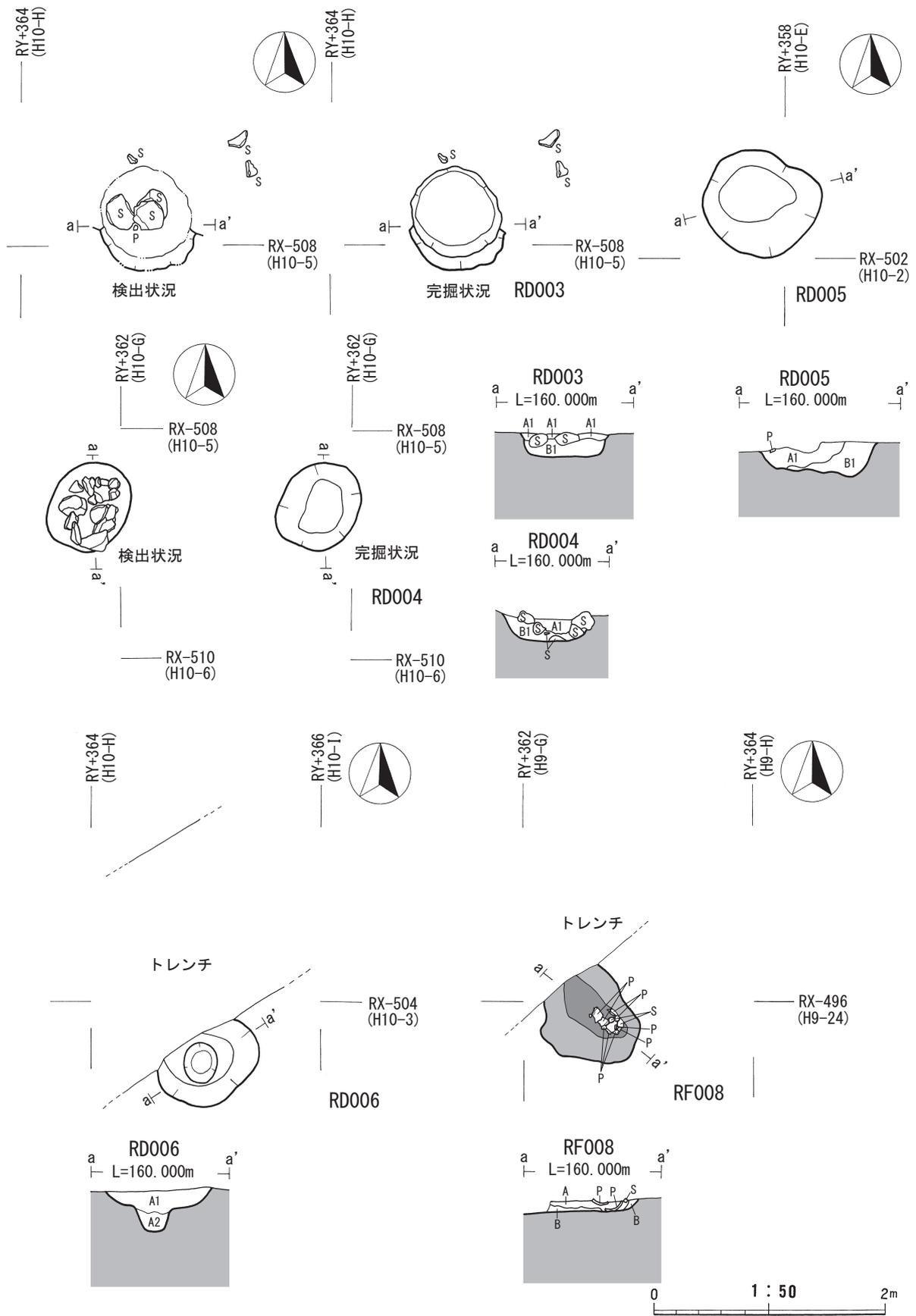
規模 北西—南東 3.49m 以上, 南西—北東 2.47m 以上

検出状況 表土下, II b 層上面で検出。配石は 0.20 ~ 0.31m 程の角礫で構成される。検出されたのは全体の一部分と思われる, 多くは現代の耕作・削平時に失われたものと思われる。角礫は地面に不安定な状態で配置されている。配石周辺に遺物が集中しており, 土器 No 1 ~ 3 (第 11 図 27 ~ 29) 等の土器が出土している。

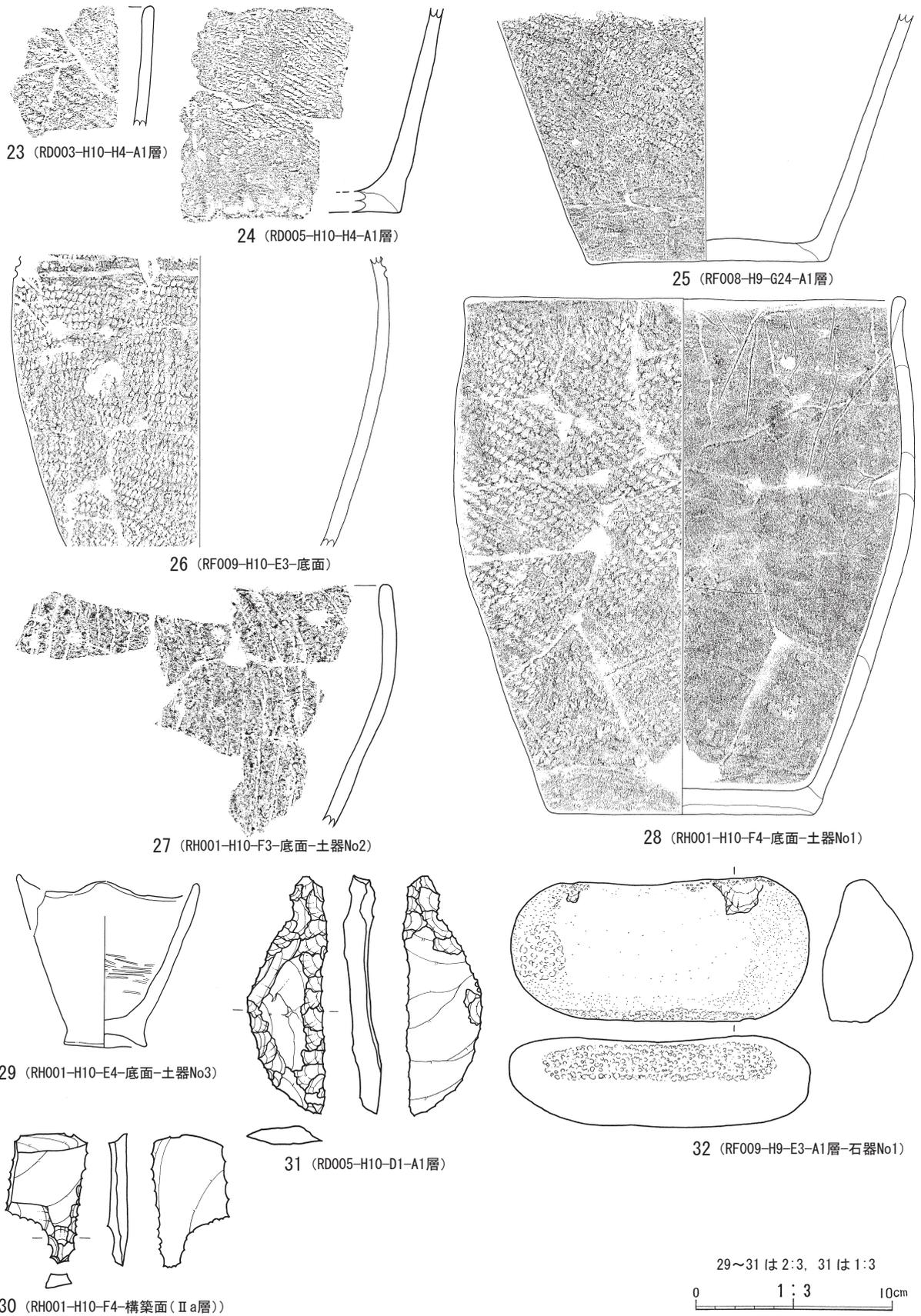
遺物 (第 11 図 27 ~ 29・30) 27 は口縁部が内湾する深鉢で, 器面には細い撚糸文 (単軸絡条体第 1 類) が縦位に施される。28 は口縁部が外反する深鉢で, 体部上半に浅い括れを持つ。単節斜縄文を縦位に施す。内面には縦位のナデ調整が見られる。29 は口縁部に突起を持つミニチュア土器で, 底部は上底状となる。30 は頁岩製の石錐で, 背面にのみ調整剥離が施される。



第 9 図 RF009 石囲炉・RH001 配石



第10図 RD003~006土坑・RF008焼土



第11図 RD003~006, RF008・009, RH001配石出土遺物

4 遺物包含層出土土器（第12図33～第28図299）

I 群 33～43は押型文・沈線文・縄文を主文様とする早期前葉の土器群で、当遺跡で最も古い時期の土器群で所謂「日計式」に類似する。Va層を中心に出土した早期前葉の土器群である。33～38は押型文が施される土器である。33～37はV字状文、38は格子目状文で、全て胎土に繊維、石英粒を少量含む。内面はナデによる器面調整を施し、平滑な面を表出させる。器壁は5mm前後と薄い。39は横位平行沈線が施される体部下半と思われる部位である。繊維を僅かに含む。40・41は横位に斜縄文を施し、横位に平行沈線を描く深鉢体部片である。繊維を含むなど胎土や内面の器面調整は押型文土器と共通する。42は結束のない羽状縄文で、胎土には繊維や石英粒を含み、内面はナデによる平滑な面が表出される。43は無文土器口縁部で、口唇部は丸頭を呈する。器面には縦位の浅い擦痕が認められる。胎土に繊維を含まない。

II 群 43～197は早期中葉の土器で、43～129は刺突文・沈線文・捺糸文・縄文を組み合わせた文様を特徴とする土器群で所謂「蛇王洞Ⅱ式」に類似する。130～192は刺突文・沈線文・貝殻文・条痕文を組み合わせた文様を特徴とする土器群で所謂「白浜式」に類似する。193～197は刺突文・沈線文・貝殻文を主文様とする土器群で、沈線で区画する文様内に貝殻文を充填施文するものもある。所謂「明神裏Ⅲ式」及び「田戸上層式」に併行する土器群と思われる。

44は口縁部下に縦位の短沈線、横位平行沈線を施し、地文には単軸絡条体(L)を横位に施す。内面は丁寧なナデによる器面調整が施される。45・46は同一個体の深鉢口縁部である。口唇部に刻目を持ち、下位に沈線による格子目文が施される。内面はミガキによる器面調整が行われ、部分的に光沢を帯びる。47は口縁部に刻目を持ち、下位に沈線による格子目文を施す。補修孔が穿たれる。48は沈線による格子目文が施される深鉢体部片である。49は砲弾状の緩いカーブを持つ器形の尖底深鉢で、器面には横位平行沈線を多重に施し、上から縦位・斜位の沈線を描く。胎土には微量の繊維を含む。50は口縁部に刻目を持ち、器面に沈線による横位・斜位の文様を描き、文様間に短沈線を充填施文する小形の尖底深鉢である。胎土には微量の繊維を含む。51は刻目または短沈線が施される深鉢口縁部片である。52は浅い沈線による斜格子目文が施される。53は口縁部に縦位の刻目を持ち、口縁部下に横位の爪形状刺突と縦位の貝殻腹縁文を施す。内面は粗いミガキで器面調整が行われる。54～63は条痕文を地文に縦位の爪形状刺突を横位平行に施す土器である。54・55の口唇部には刻目が施される。64は尖底付近の部位で、横位の爪形状刺突を縦位多段に施す。65は円形刺突を口縁部下に横位並列で施す。器面には浅い縄文が施され、胎土に微量の細かい繊維を含む。66は尖底部から直線的に器壁が延びるフォルムを持つ尖底深鉢である。口縁部下に刻目、多条の横位平行沈線、体部には主文様と思われる縦位の平行沈線と斜位の帯状格子目文、体部と底部の間には多条の横位平行沈線が描かれる。地文には単軸絡条体(L)を横位に施す。胎土には細かい繊維を含む。67は口縁部に刻目を持ち、下位に沈線による格子目文、格子目文は口縁部に帯状に描かれ、文様下に爪形状刺突、地文には条痕文が施される。胎土には多量の石英と長石を含む。68～71は口縁

部下に大きな刻目を持ち、器面に単軸絡条体（L）を横位に施す深鉢である。71の原体は長さ約3cmと短く、条の表出が不安定なことから軸が軟らかいものである可能性がある。72～81は単軸絡条体（L）を横位に施した器面に刻目、爪形状刺突を施したものである。77の胎土には海綿骨針、81には繊維が含まれる。82～103は単軸絡条体（L）を横位に施した深鉢体部片で、86～88は同一個体で胎土に細かい繊維または植物片のようなものが混入する。83の上部には爪形状刺突が施される。83・103には細かい繊維が含まれる。104～106は単軸絡条体（L）を横位に施す尖底深鉢底部で、胎土に微量の繊維が含まれるほか、105には植物片が混入する。107は単軸絡条体（L）を斜位に施す。原体の長さは約1.5cmと短い。胎土には微量の繊維を含む。108～110同一個体の深鉢で、体部には単軸絡条体で縦位の文様・斜位の文様を描く。器体上部と思われる109には単軸絡条体の側面圧痕が施される。胎土には繊維、黒色の鉱物粒が含まれる。111～115は同一個体の深鉢で、上部には単軸絡条体の側面圧痕が横位・斜位に連続して押捺される。下位には単軸絡条体を横位・斜位に回転施文する。胎土には少量の繊維を含む。116～119は同一個体の深鉢で、口唇部に刻目を持ち、口縁部下に縦位の爪形状刺突を横位に連続施文する。器面には直前段反撚（RRL）を横位・斜位に施す。胎土には繊維を含む。123・124は同一個体の深鉢で、条痕文上に直前段反撚（LLR）を横位に施す。胎土に微量の植物片を含む。125～129は同一個体の深鉢で、125上部には縦位の爪形状刺突を横位に施す。器面には反撚の原体を横位に施す。129は尖底部である。胎土には微量の繊維を含む。

130は緩いカーブを描く砲弾状の尖底深鉢である。口縁部下に2段の爪形状刺突列、体部には3条1組の押しきによる幾何学文が施される。胎土には微量の繊維を含む。131は器壁が直線的に外傾する尖底深鉢である。口唇部に刻目を持ち、体部には口縁部下より横位多段に貝殻腹縁文を施文する。胎土には黒色の鉱物粒と微量の繊維を含む。132・133は口縁部下に刻目を持ち、器面に深い条痕文を施す深鉢である。胎土には黒色の鉱物粒を含む。134・135は器面に浅い横位の条痕文を施す深鉢口縁部である。136は器壁が外反する深鉢で、口唇部には刻目が施される。器面はミガキにより光沢を帯びる。胎土には石英粒、黒色の鉱物粒が含まれる。137は器壁が直線的に外傾する尖底深鉢で、口唇部には刻目が施され、口縁部下には爪形状刺突列が2段施される。器面には条痕文が横位に施される。胎土には黒色の鉱物粒を含む。138～141は同一個体の深鉢で、口縁部が大きく外反する深鉢である。口唇部に刻目を持ち、指頭大の圧痕を口縁部下に並列して施す。器面には粗い条痕文を斜位に施す。胎土には黒色の鉱物粒と微量の繊維を含む。142～144は条痕文を地文に浅い沈線を描く深鉢体部片である。142の胎土には微量の植物片が含まれる。145は深い条痕文を横位に施す深鉢口縁部である。146は口縁部に刻目を持つ小形深鉢で器面は縦位のミガキが施される。147は口唇部が外にめくれる深鉢で、器面には横位の擦痕が見られる。148・149は横位の擦痕が見られる深鉢口縁部片である。150～162は条痕文が施される深鉢体部片で、153・160・162には微量の繊維が含まれる。163～168は尖底深鉢下部の無文部で、全て微量の繊維が含まれる。169は条痕文を地文に浅い沈線を斜格子目状に施す深鉢体部片で、内面は丁寧なナデによる調整が施される。170は斜位の

浅い沈線を施す深鉢体部片で、胎土に繊維を含む。171～192は尖底深鉢の底部付近～底部にかけての部位である。全て無文で、190・192には縦位のミガキによる器面調整痕が見られる。190以外の土器には微量の繊維が含まれる。

193・194は同一個体の深鉢で、体部には横位・斜位の平行沈線による幾何学文が描かれる。幾何学文内の空間には貝殻腹縁文を縦位に充填施文する。底部とは5条の横位平行沈線によって区画され、地文は深い条痕文が施される。胎土には微量の繊維が含まれる。195・196は同一個体の深鉢で、口縁部は波状を呈する。口唇部には刻目が施され、器面には横位平行沈線・短冊状の刺突列が交互多段に施される。器面はミガキによる器面調整が施され、内面は光沢を帯びる。繊維は含まない。197は尖底部で貝殻腹縁文が施される。

III 群 198～243は早期後葉の土器で、微隆起線による梯子状・幾何学状文、条痕文が表裏に施される。器壁は5mm前後と薄く、胎土には雲母が多量に含まれる。所謂「槻木Ⅰ式」に類似する土器群である。

198～203は深鉢口縁部片で、198の口縁部は波状を呈する。内外面に条痕文が施され、胎土には雲母を含む。204～227は微隆起線による梯子状の幾何学文を施す深鉢体部片で、内外面に条痕文が施される。胎土には雲母が含まれる。228～229は内外面に条痕文が施される深鉢体部下半から底部にかけての部位で、243は乳頭状の尖底を呈する。胎土には雲母を含む。

IV 群 244・245及びRAO01 竪穴建物跡第8 図1～4が該当する。前期初頭の土器で、羽状縄文を特徴とし、胎土には微量の繊維が含まれる。所謂「長七谷地Ⅲ群」、「千鶏Ⅰ式」に併行する土器群と思われる。

V 群 246～268は第Ⅳ群に後続すると思われる前期初頭の土器である。器面には単節斜縄文・組紐縄文が密に施され、胎土には多量の繊維が含まれる。所謂「千鶏Ⅱ式」に該当する。

246は縄文原体末端を横位並列に押捺した深鉢で、胎土には多量の繊維を含む。247～256は口縁部片で、249・252・255・256の口唇部には縄文原体の圧痕が施される。器面には単節縄文(LR)と思われる縄文が施され、胎土には繊維が多量に含まれる。257・258は単節斜縄文(LR)を施す深鉢である。259は複節縄文を横位・斜位に施す尖底深鉢で底部付近は縄文が擦り消される。胎土には多量の繊維を含む。260～268は直前段反撚(RRLR)？が施される深鉢体部片で、胎土には多量の繊維が含まれる。268は組紐縄文の可能性はある。

VI 群 269は口縁部に横位のS字状沈文が横位に施される深鉢で、口縁部が僅かに外反する。前期前葉の「大木2b式」に併行する土器と思われる。

VII 群 270～293は縄文時代後期前葉の土器で、刻目のある隆線文・ボタン状貼付文等を施す土器群である。特徴的な土器が少ないため型式名は控える。

270～273は同一個体の深鉢で、沈線による直線的な文様が描かれ、沈線内には縄文が充填施文される。274は突起のある深鉢口縁部で、突起下に刻目のある隆線による渦巻文が施される。275は上部の無文帯下に鎖状隆線を横位に施す深鉢である。276は口縁部に無文帯を設ける深鉢である。頸部に網目状撚糸文の原体圧痕が施され、下位は回転施文される。277～281は深

鉢口縁部片で、沈線による曲線文が描かれる。282・283は沈線による文様内に縄文を充填施文するものである。284～290は地文のみが施される粗製深鉢で、284～286が口縁部、287～289が体部片である。290は体部上半に最大径を持つ。291～293は深鉢底部で、292・293の底部には木葉痕が見られる。

Ⅷ 群

294～298は撚りの大きい絡条体を縦位に施す甕で、口縁部は大きく外反し絡条体を波状に圧痕する。器壁は約5mmと薄く、内面は丁寧なナデによる器面調整が施される。299は付加条縄文を施す甕で不整であるが帯状に原体を回転施文する。下半は斜位に施文する。弥生時代終末期の土器と思われる。

土製品

300～304はミニチュア土器で、301・302は胎土に雲母を含み、器形は指頭による整形により凹凸がある。胎土から見て早期後葉としたⅢ群土器に伴うものと思われる。303は沈線による斜格子目文が描かれる。底部にも沈線による文様が描かれる。304は口縁部に高低差のあるミニチュア土器で、ナデによる器面調整が施される。305は小破片からの復元図であるが、土鈴状の器形を呈する。306は土器片の縁辺を研磨して三角状にした製品である。303～306は縄文時代後期前葉のものと思われる。

5 遺物包含層出土石器（第29図1～第34図72）

剥片石器

1～23は石鏃で、1～4・6～9・15・20の基部には浅い抉りがある。5・10～12・16～18・21・22は石鏃の未成品と思われる。10・11は打瘤など剥離の途中で生じた高まりを剥離で除去したものと思われる。全て頁岩製である。

24～27は突出部のある両面加工石器で、24・26は破損した石槍を再加工した製品である可能性がある。24は粘板岩製、25～27は頁岩製である。

29～34は頁岩製の石匙で、29・30はつまみ部及び背面全周縁に入念な押圧剥離が施される。32・33は刃部を欠損、34はつまみ部を欠損するものである。

35～44は削器と思われる剥片石器である。35は背面左側縁上部に抉りを入れ、刃部先端が切出状となる石器で、粗製の石匙のようにも思われる。36は一縁辺に刃こぼれ様の微細剥離痕が見られる。37・38・43は一側縁に連続剥離を施す削器で、38・43は刃部先端が尖がる。39～42は縁辺が曲線的に整形される石器である。43は玉髓製で、35～42・44は頁岩製である。

45～47は剥片下端に刃部を持つ搔器で、45・46は刃部を剥離整形しながらも基部調整を施さない。47は基部調整のみ施す。3点全て頁岩製である。

48～56は石篋、もしくは石篋を再加工した石器である。48～50は刃部再生をした石篋と思われ、49は腹面下端に刃部調整と思われる剥離が集中する。51・53は刃部、52基部が破損した石篋である。54・55は刃部が幅広の石器で形状から石篋とした。56は刃部以外を剥離整形したものである。54は流紋岩製で48～53、55・56は頁岩製である。

57は全周縁に整形剥離を施す両面加工石器で、58は一側縁に鋸歯状の刃部を持つ抉入石器

である。57・58 共に頁岩製である。

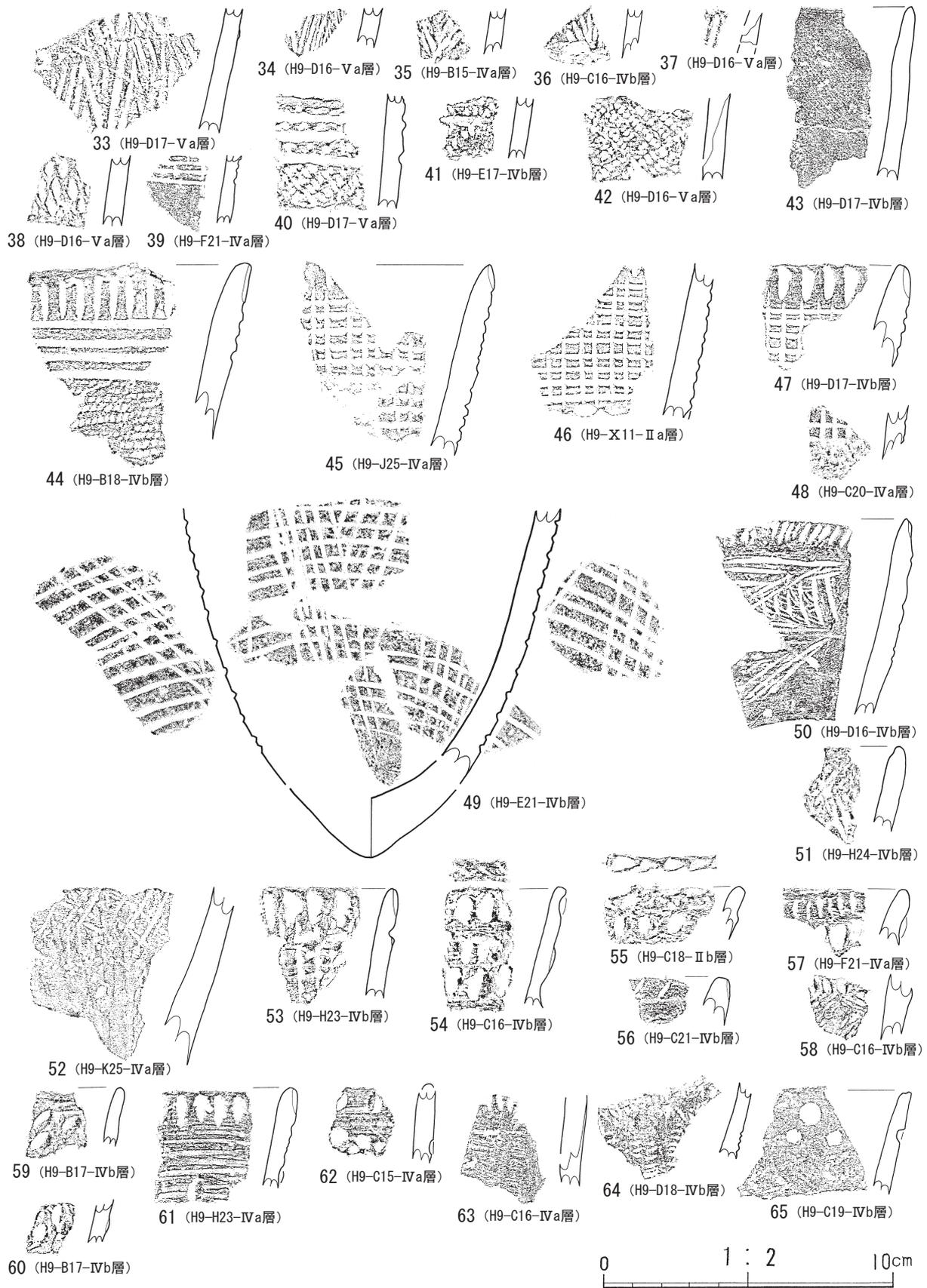
59・60 は石核で、59 は打面を転移させながら剥片剥離を行う。60 は一面の打撃面から剥片剥離を行う。59 は玉髓製、60 は頁岩製である。

61 は花崗閃緑岩製の敲打器または楔的な利器に転用した磨製石斧である。62 は凝灰岩製の打製石斧で背面に自然面を残す。

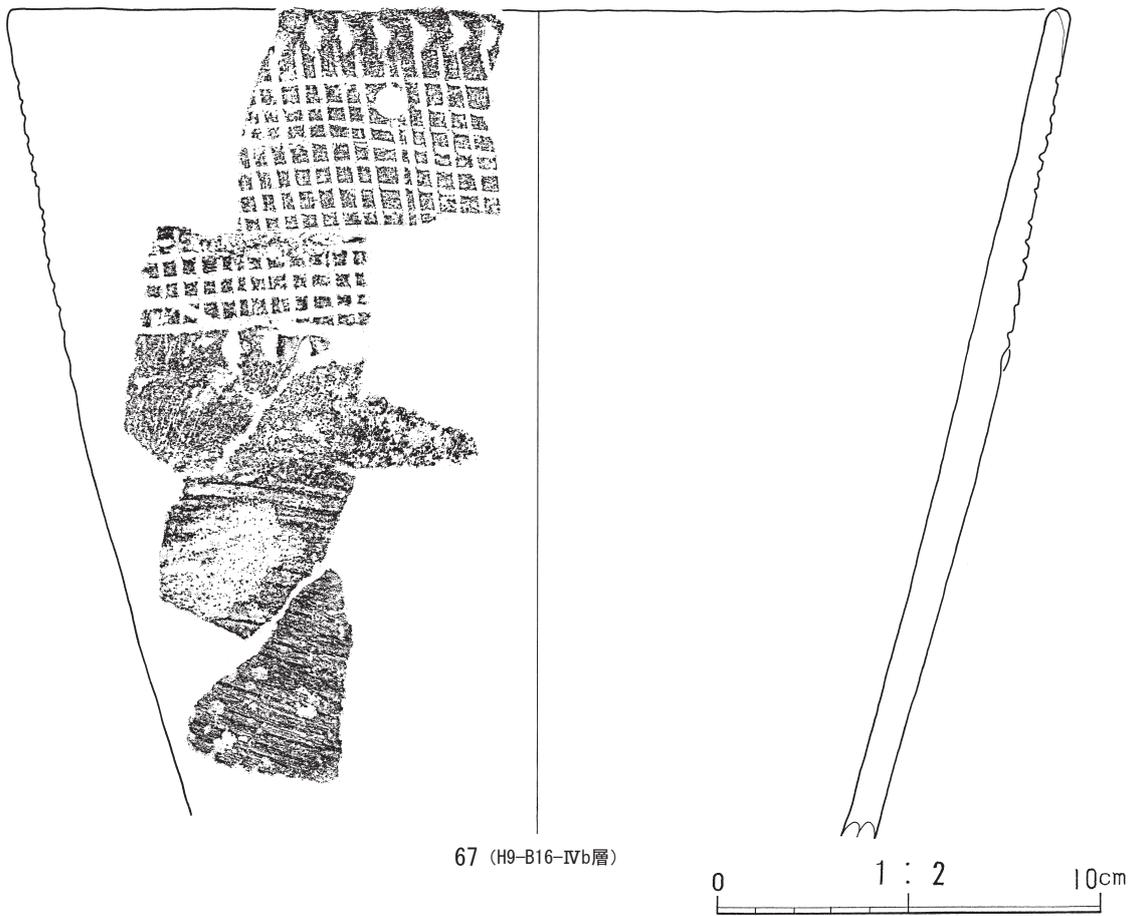
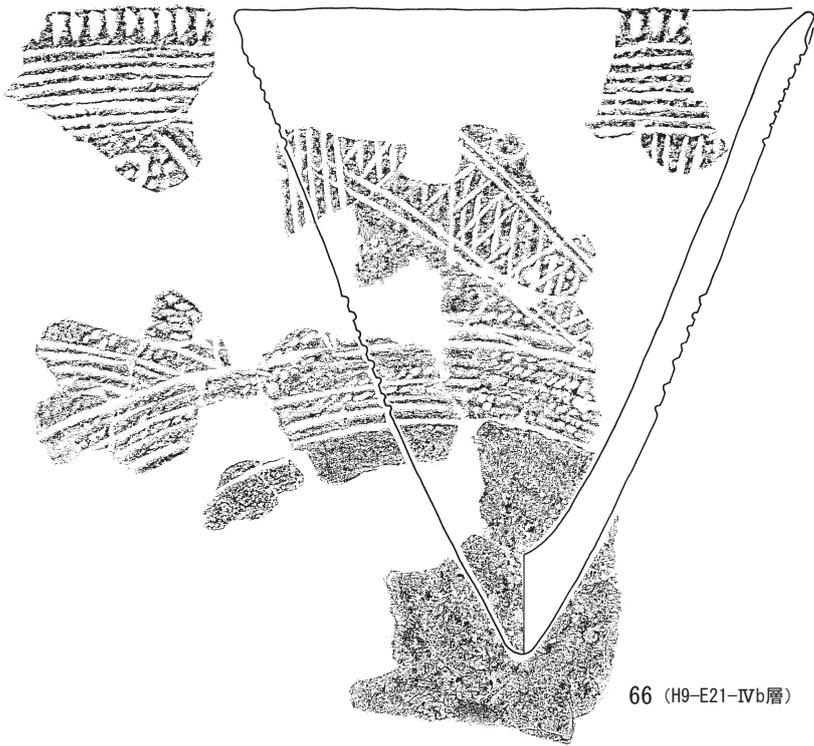
63 ～ 69 は断面三角形の円礫を利用した敲打磨石で、稜に擦面を残す。65 が凝灰岩製、63・64・66 ～ 69 は砂岩製である。

70・71 は両端に抉を入れた石錘で、71 には擦痕がある。70 が粘板岩、71 は安山岩製である。

72 は角閃石を多く含む安山岩製の円盤状磨石で側面は敲打、両面は研磨される。



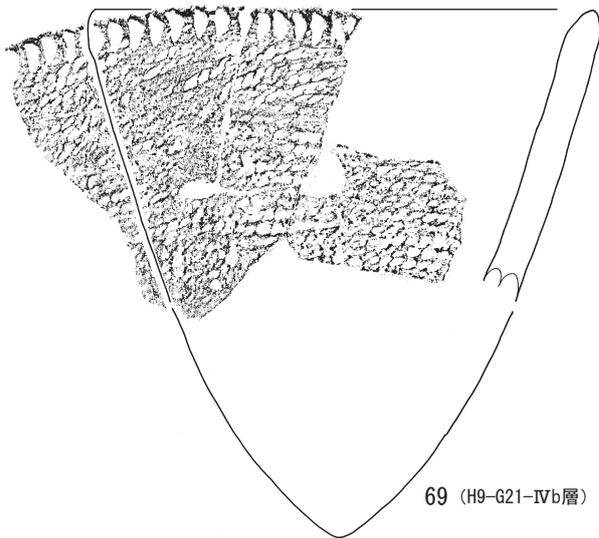
第 12 図 遺物包含層出土土器 (1)



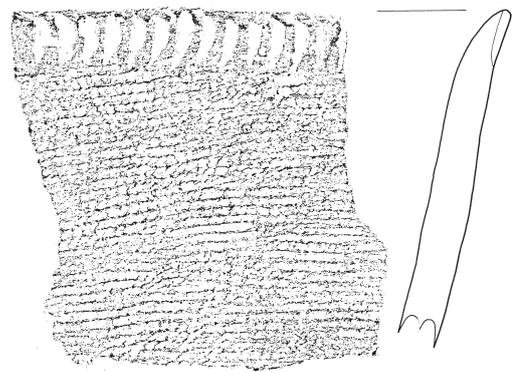
第13図 遺物包含層出土土器(2)



68 (H9-C19-IVb層)



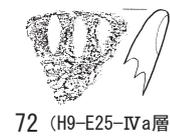
69 (H9-G21-IVb層)



70 (H9-D19-IVc層)



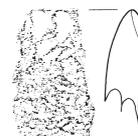
71 (H9-E19-IVa層)



72 (H9-E25-IVa層)



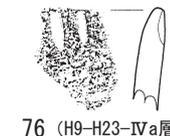
73 (H9-C18-IIb層)



74 (H9-I23-IVa層)



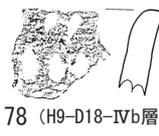
75 (H9-F17-IVa層)



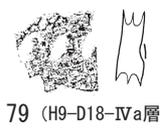
76 (H9-H23-IVa層)



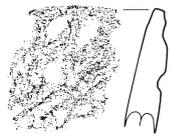
77 (H9-B20-IVb層)



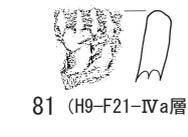
78 (H9-D18-IVb層)



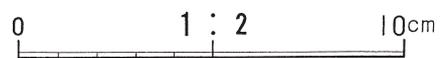
79 (H9-D18-IVa層)



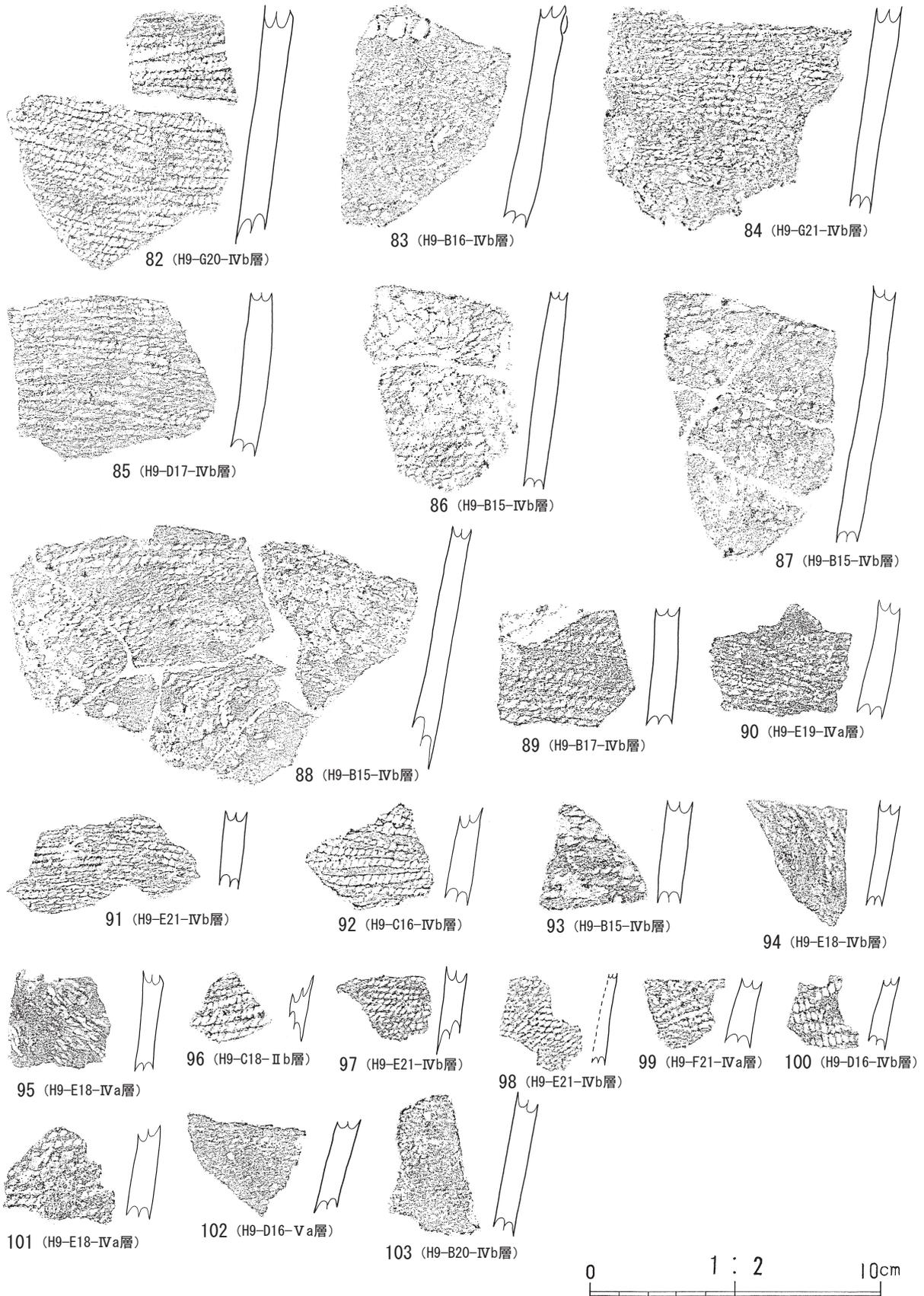
80 (H10-G5-IIb層)



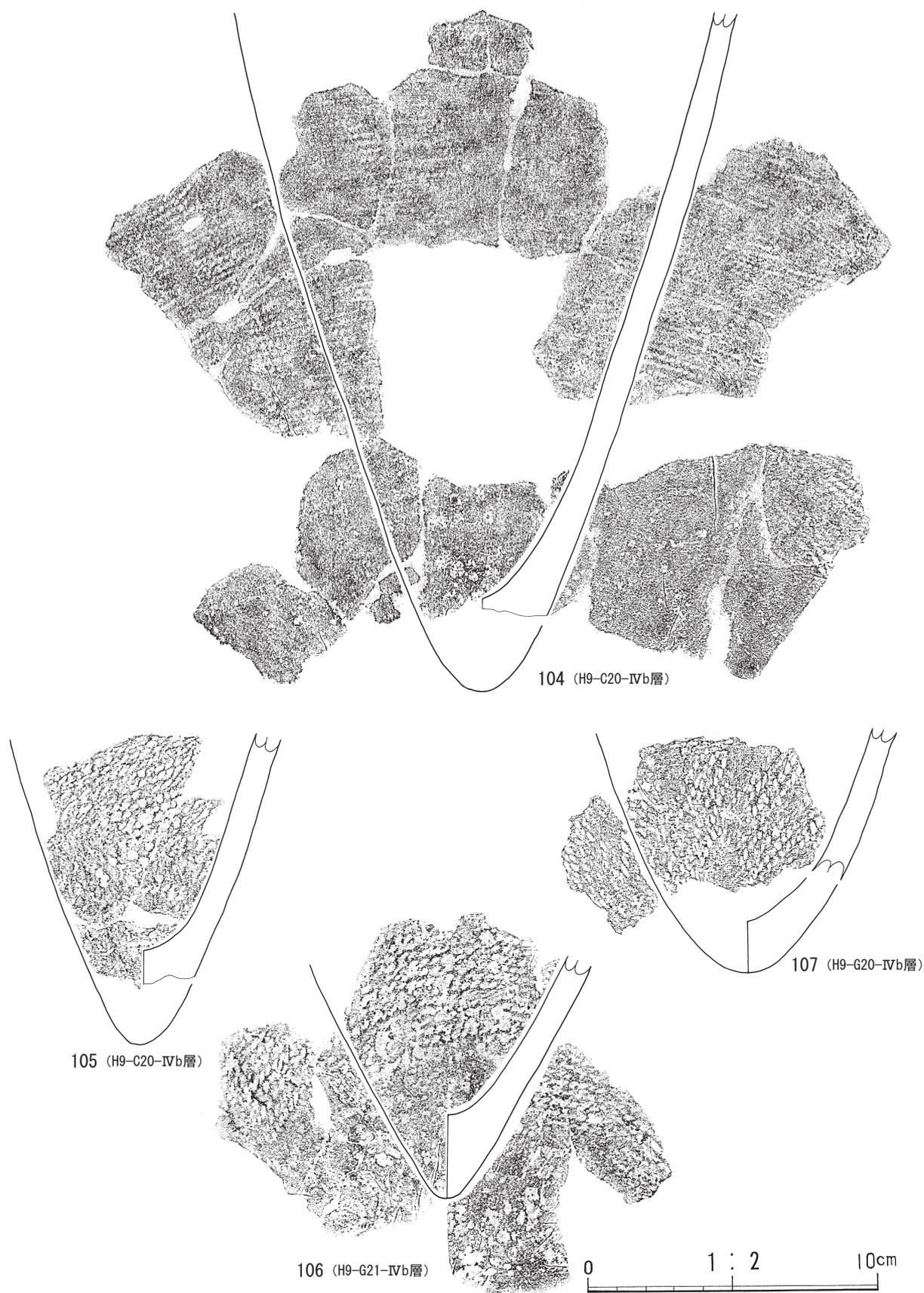
81 (H9-F21-IVa層)



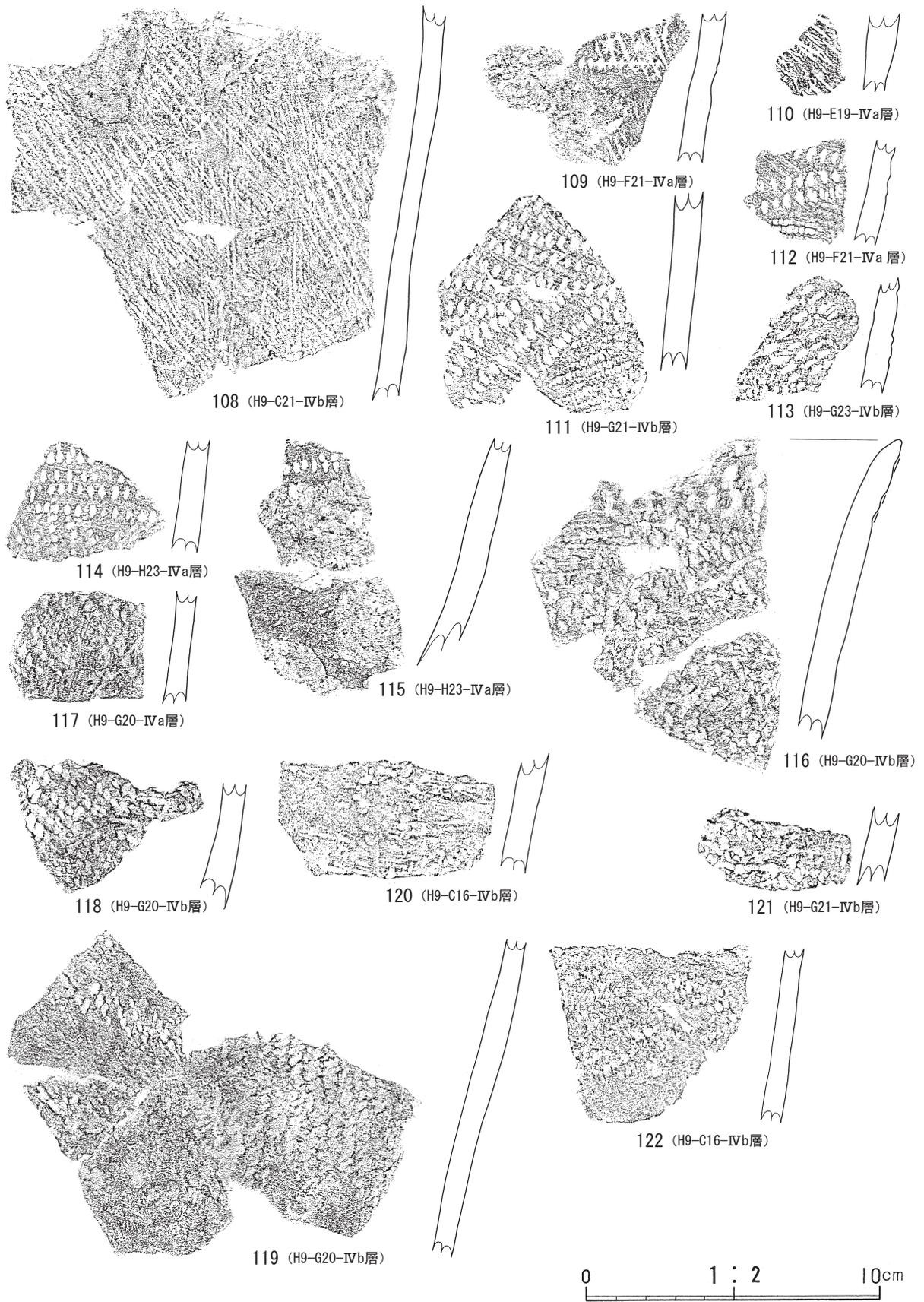
第14図 遺物包含層出土土器(3)



第 15 図 遺物包含層出土土器 (4)



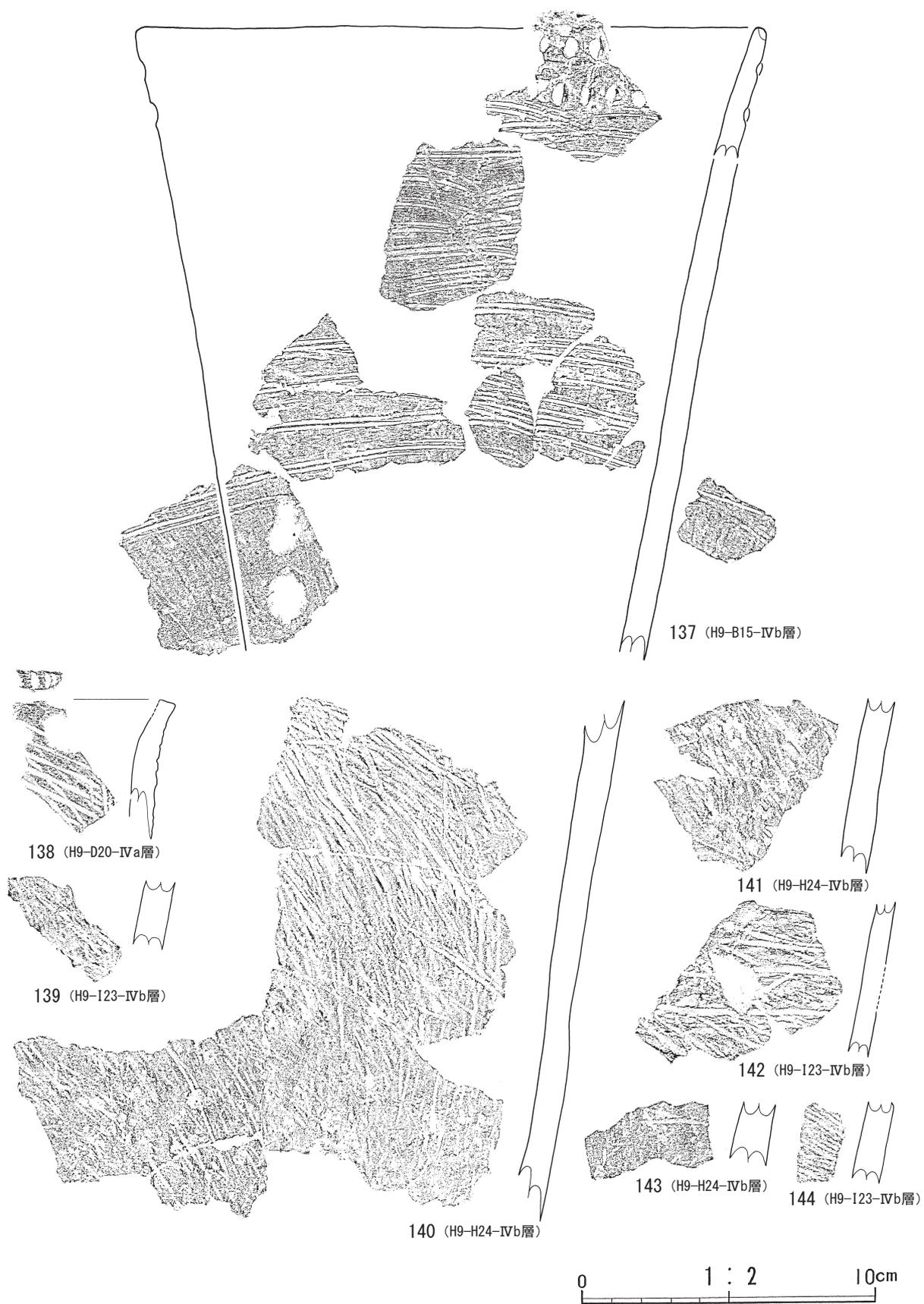
第 16 図 遺物包含層出土土器 (5)



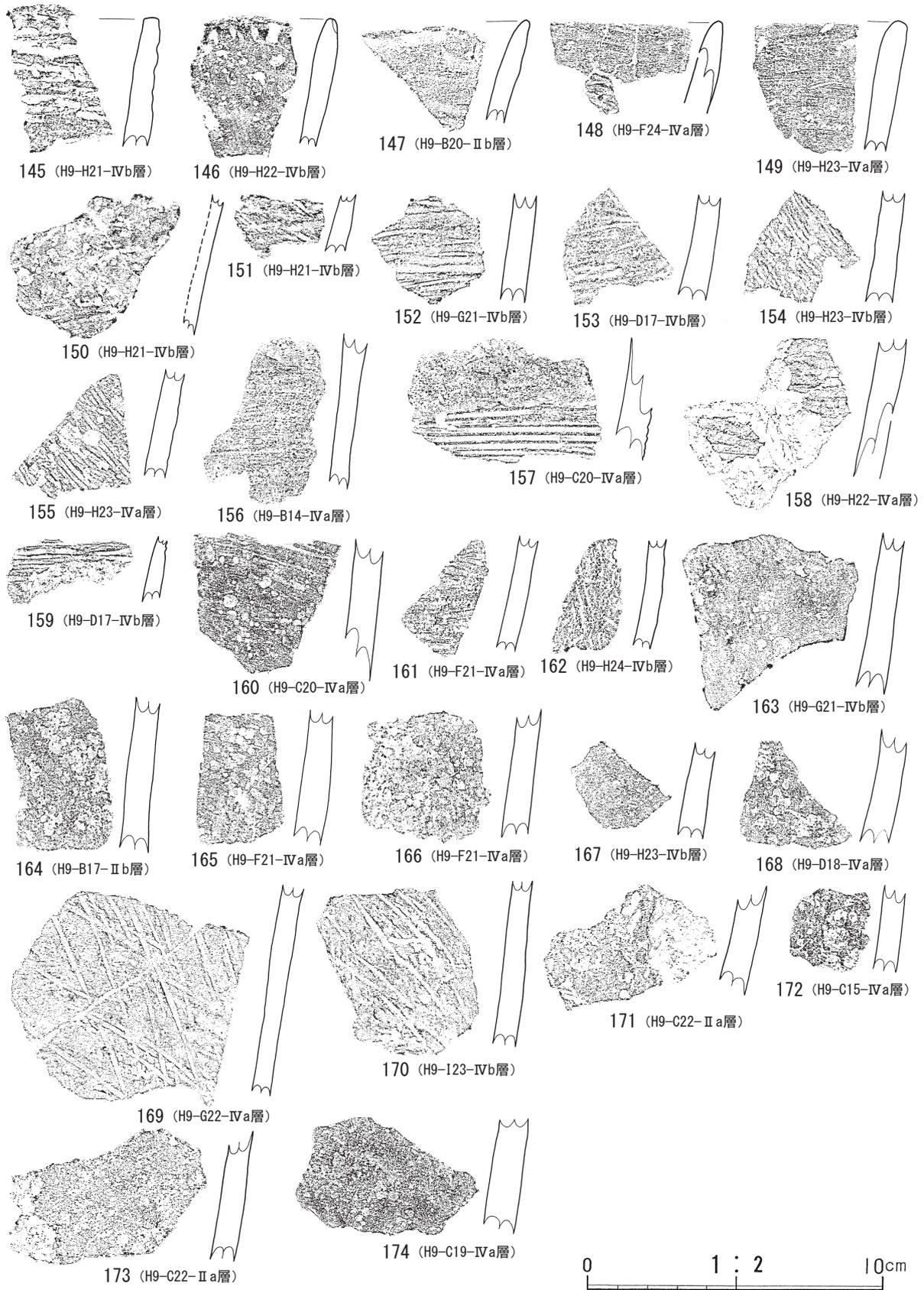
第 17 図 遺物包含層出土土器 (6)



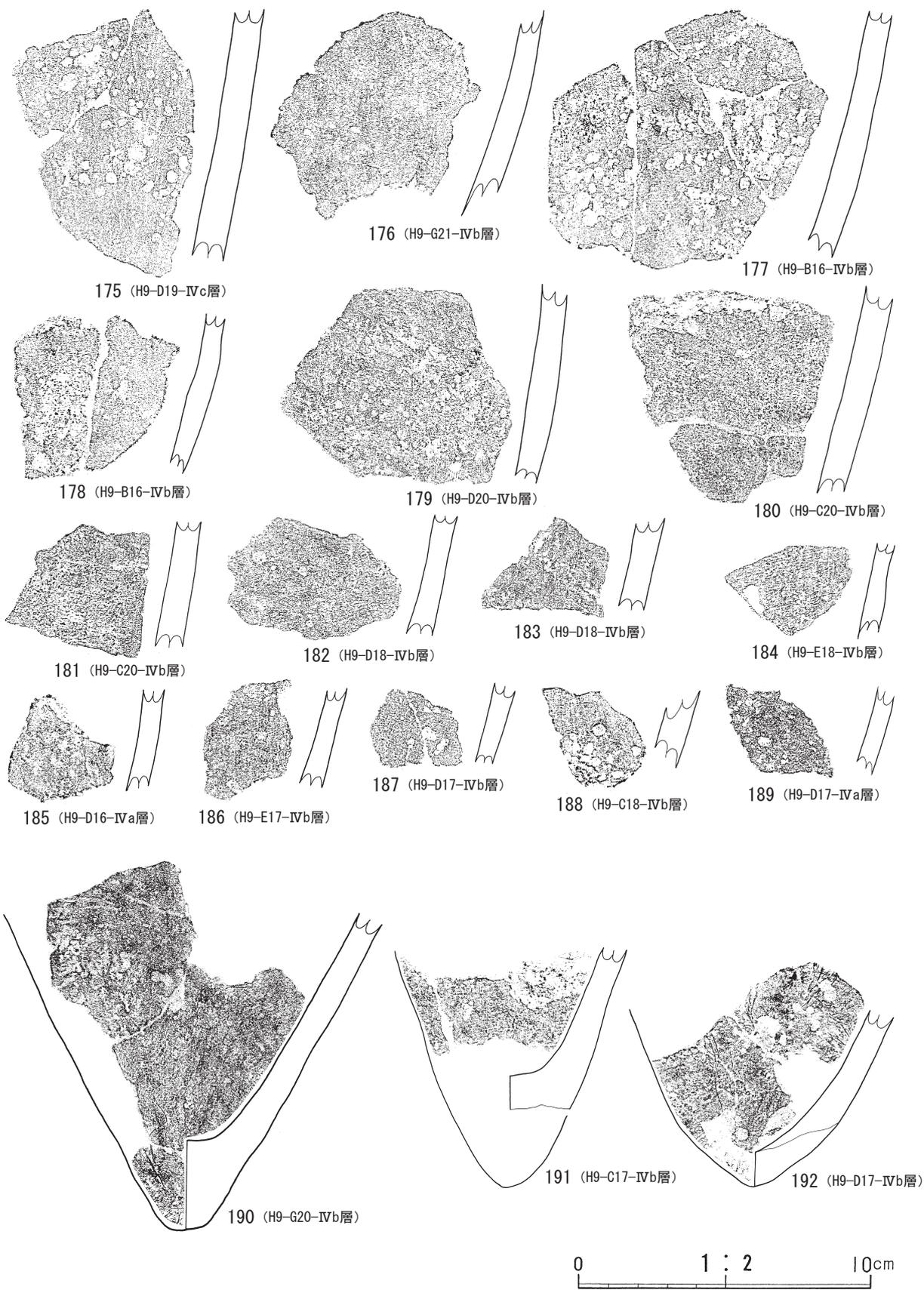
第 18 図 遺物包含層出土土器 (7)



第 19 図 遺物包含層出土土器 (8)



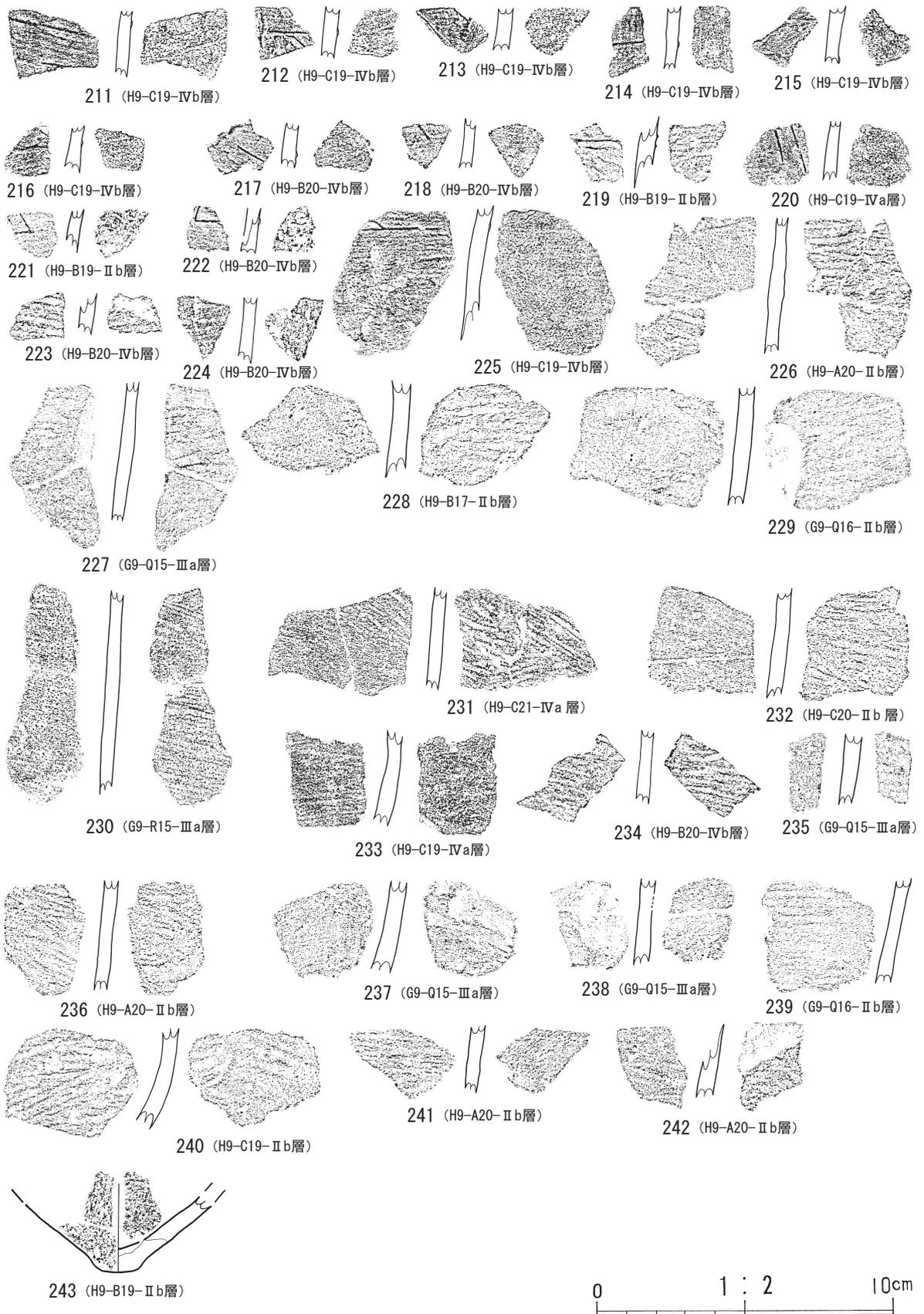
第 20 図 遺物包含層出土土器 (9)



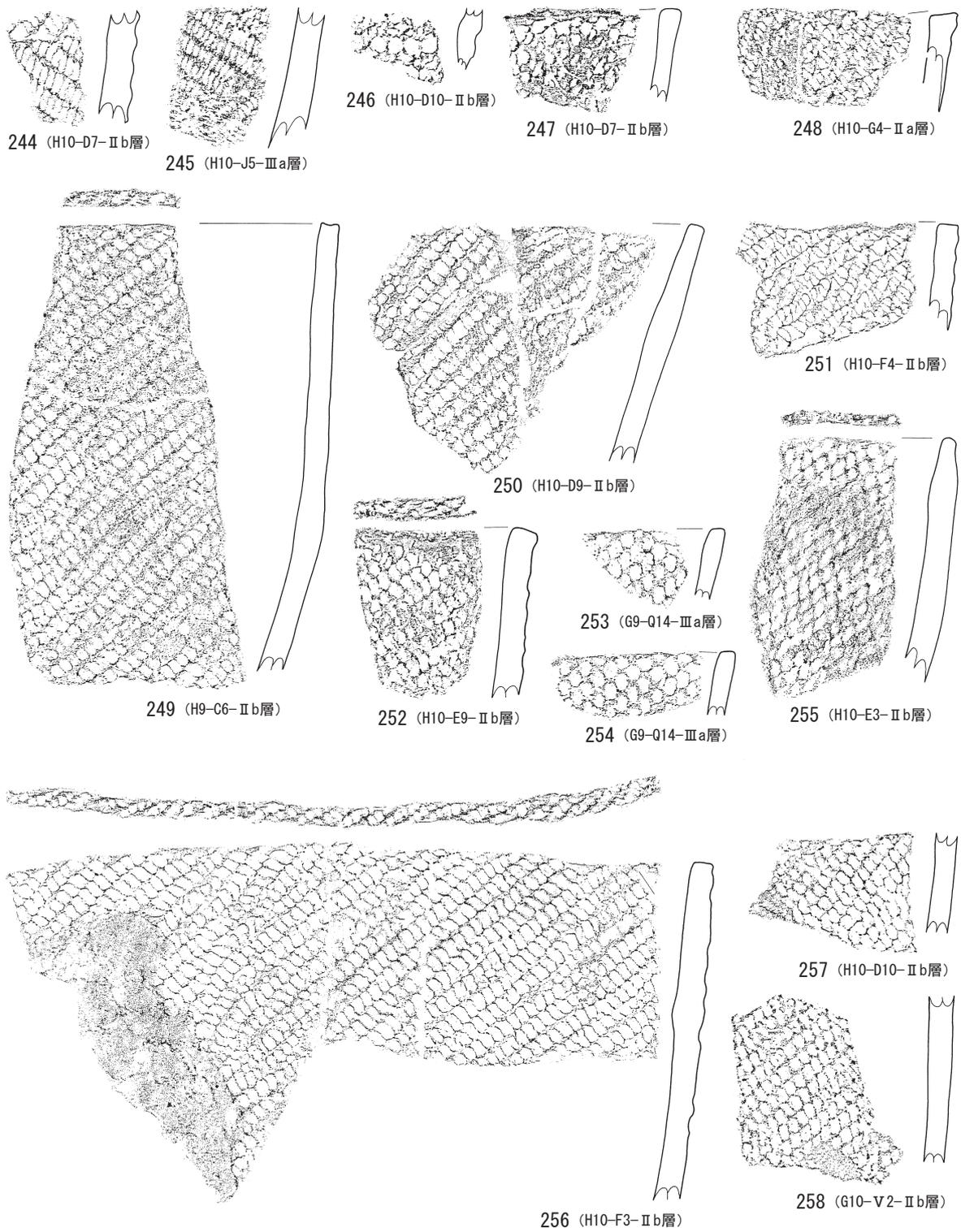
第 21 図 遺物包含層出土土器 (10)



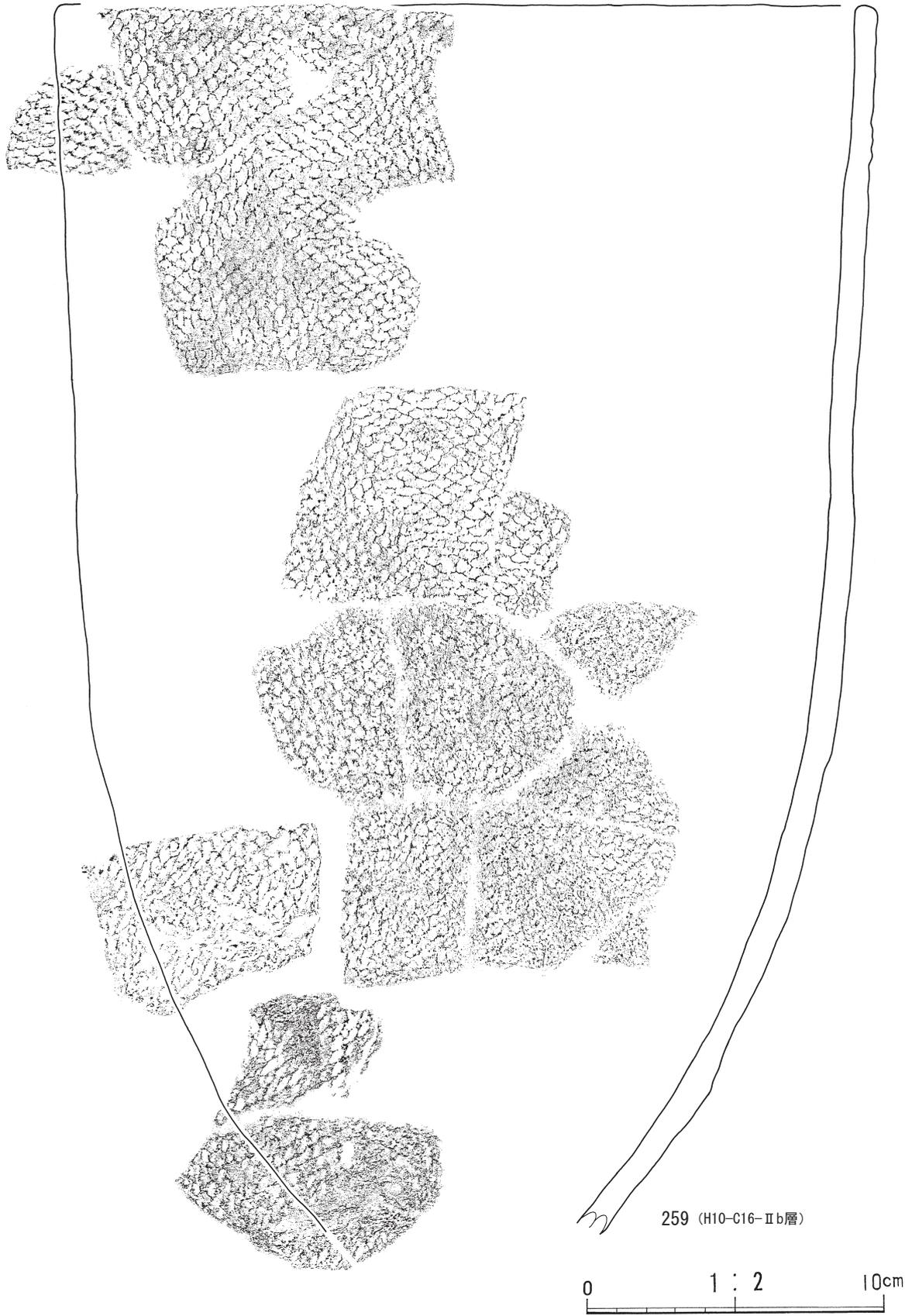
第 22 図 遺物包含層出土土器 (11)



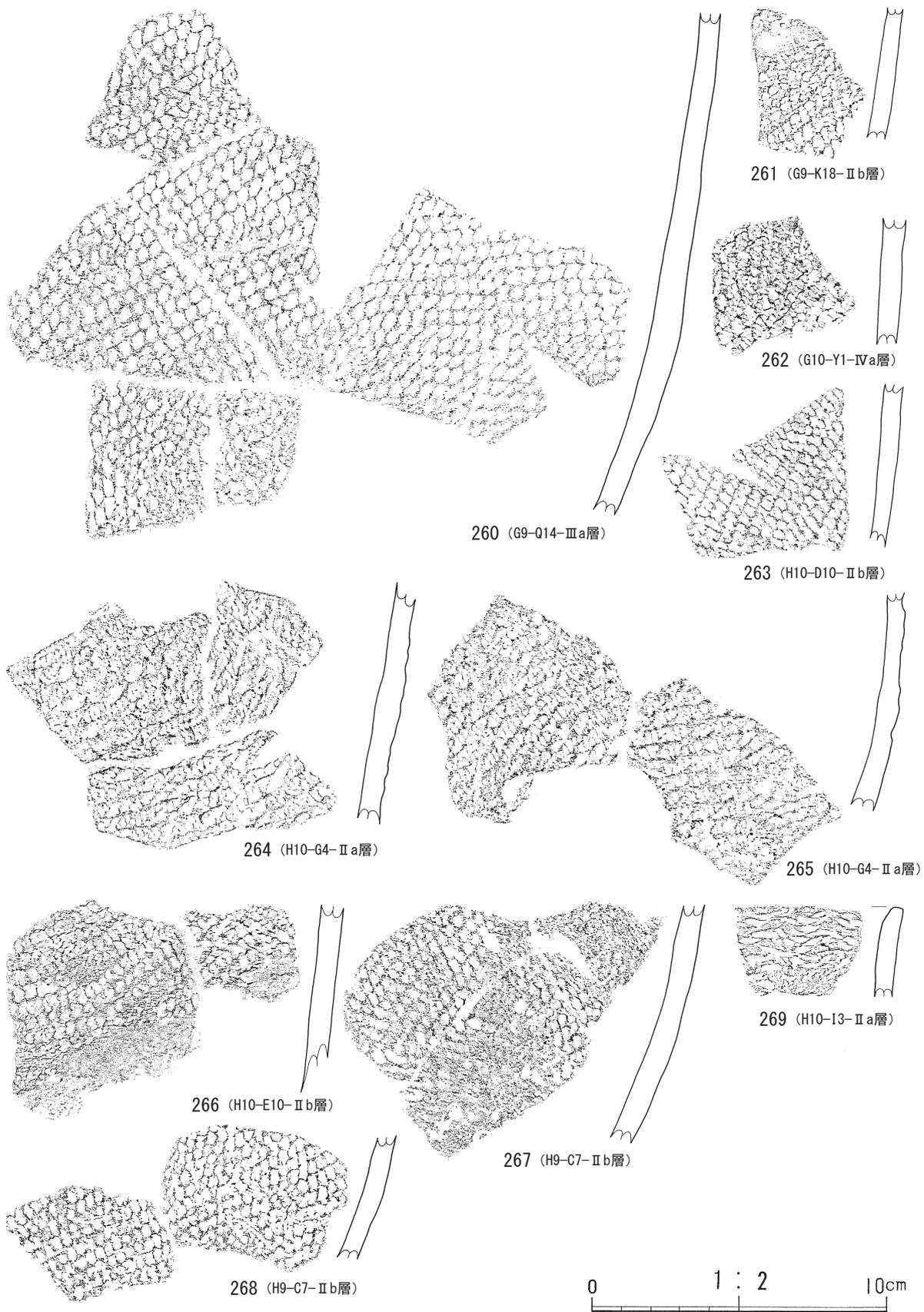
第 23 図 遺物包含層出土土器 (12)



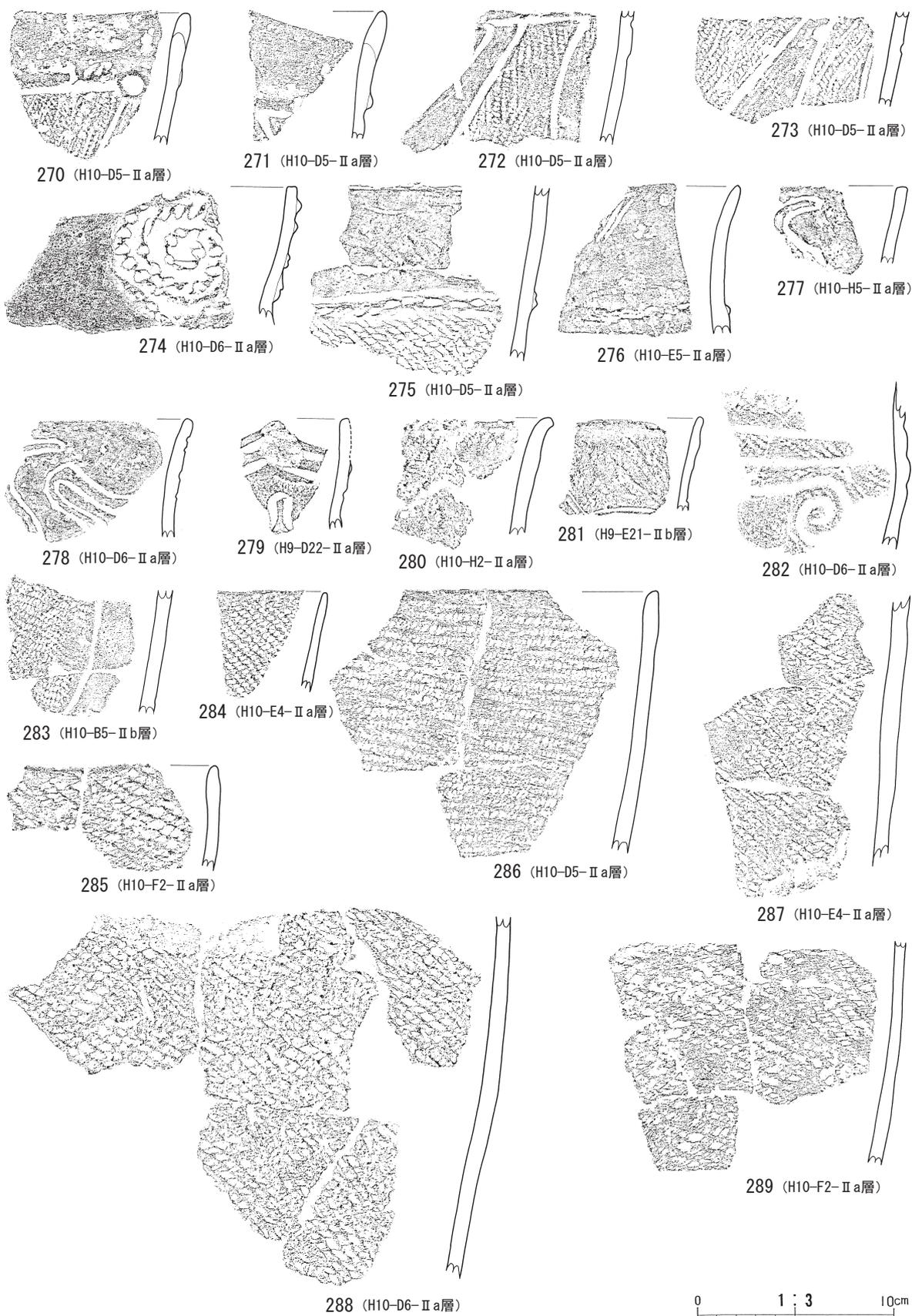
第 24 図 遺物包含層出土土器 (13)



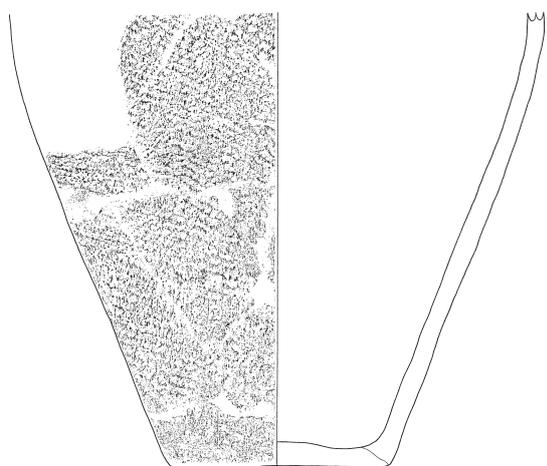
第 25 図 遺物包含層出土土器 (14)



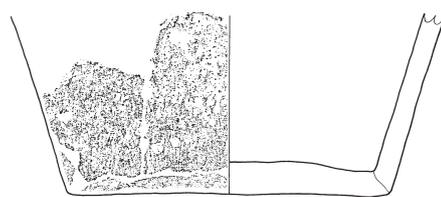
第 26 図 遺物包含層出土土器 (15)



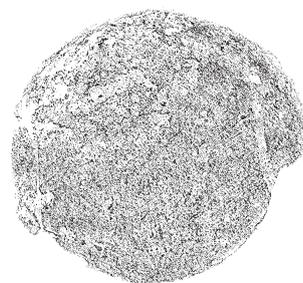
第 27 図 遺物包含層出土土器 (16)



290 (H10-G5-II a層)



291 (H10-E5-II a層)



292 (H10-I5-II b層)



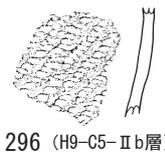
293 (H10-E5-II a層)



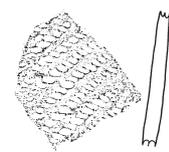
294 (H9-C5-II b層)



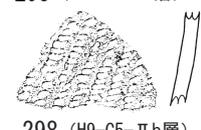
295 (H9-C5-II b層)



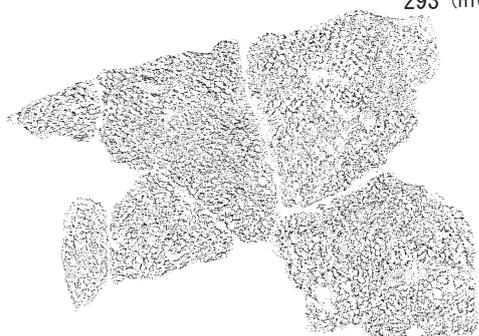
296 (H9-C5-II b層)



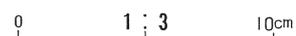
297 (H9-C5-II b層)



298 (H9-C5-II b層)



299 (H9-E5-II a層)

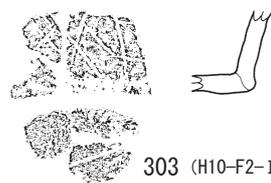


300 (H9-D21-IV b層)

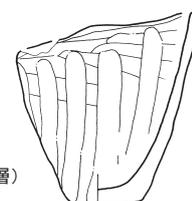


302 (H9-C20-II b層)

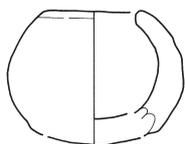
301 (H9-D18-IV b層)



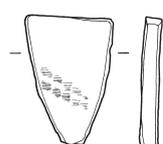
303 (H10-F2-II a層)



304 (H9-G25-II a層)

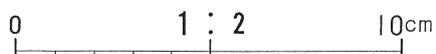


305 (H10-D6-II a層)

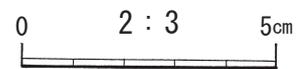
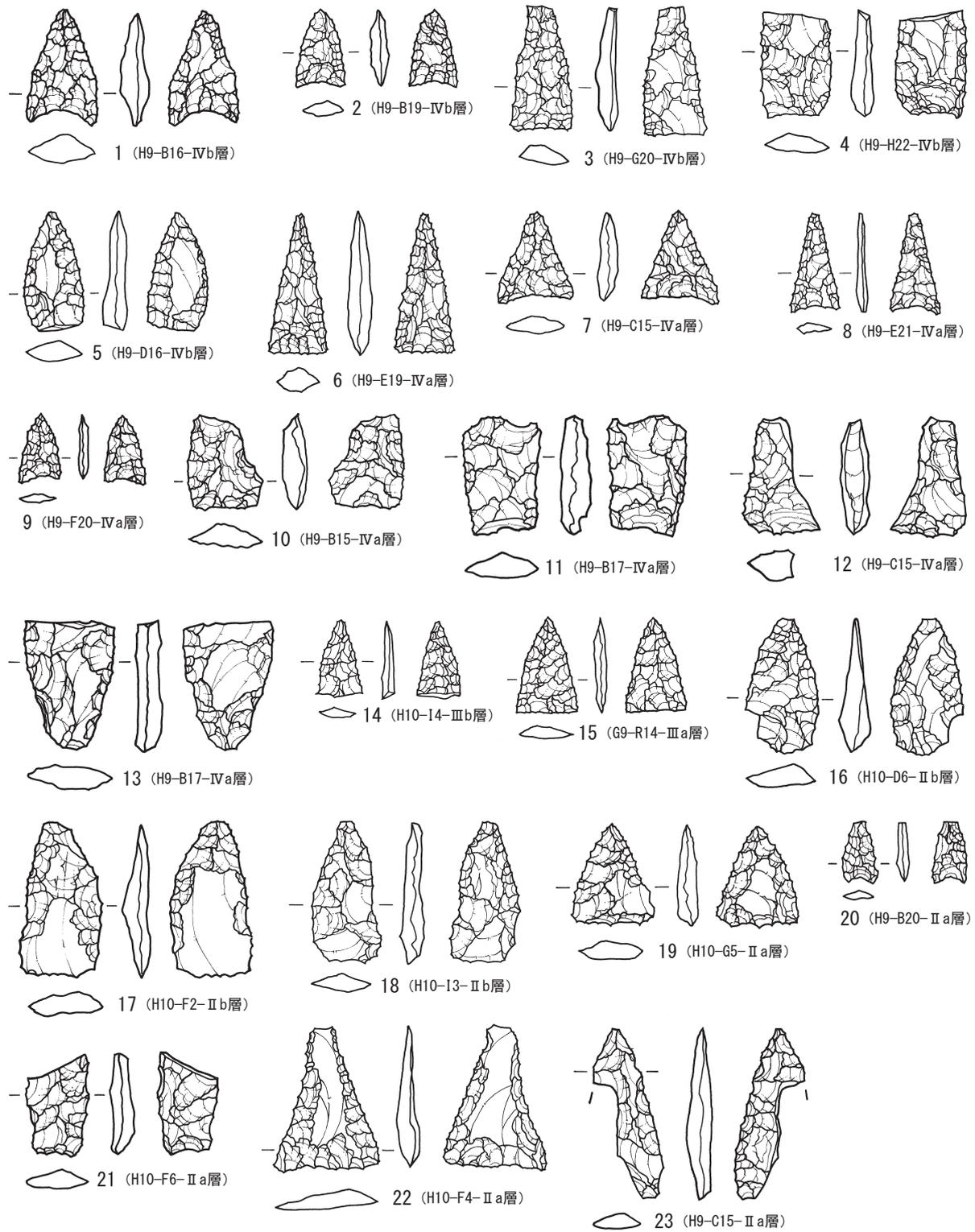


306 (H10-B5-II b層)

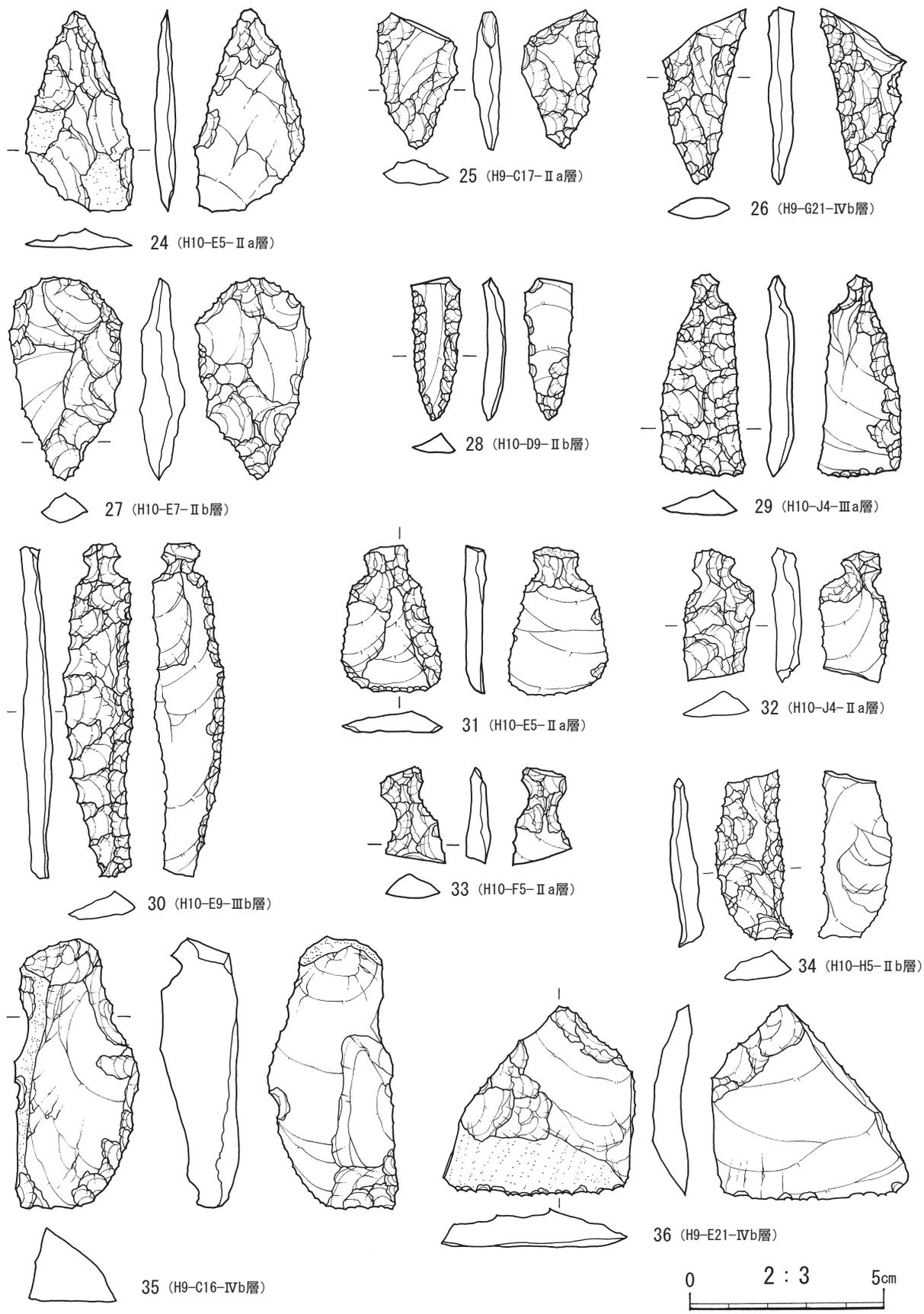
(300~306)



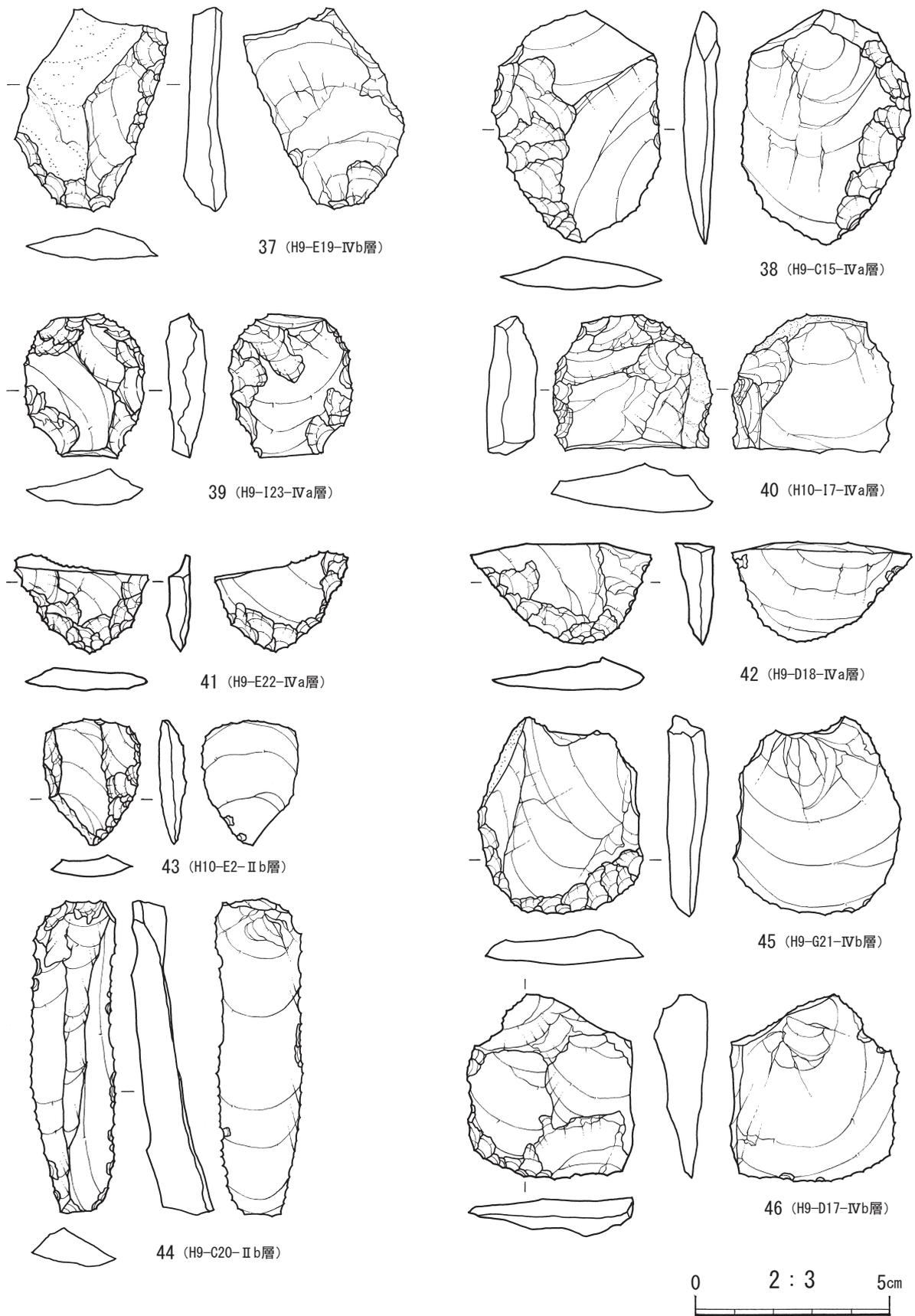
第 28 図 遺物包含層出土土器・土製品 (17)



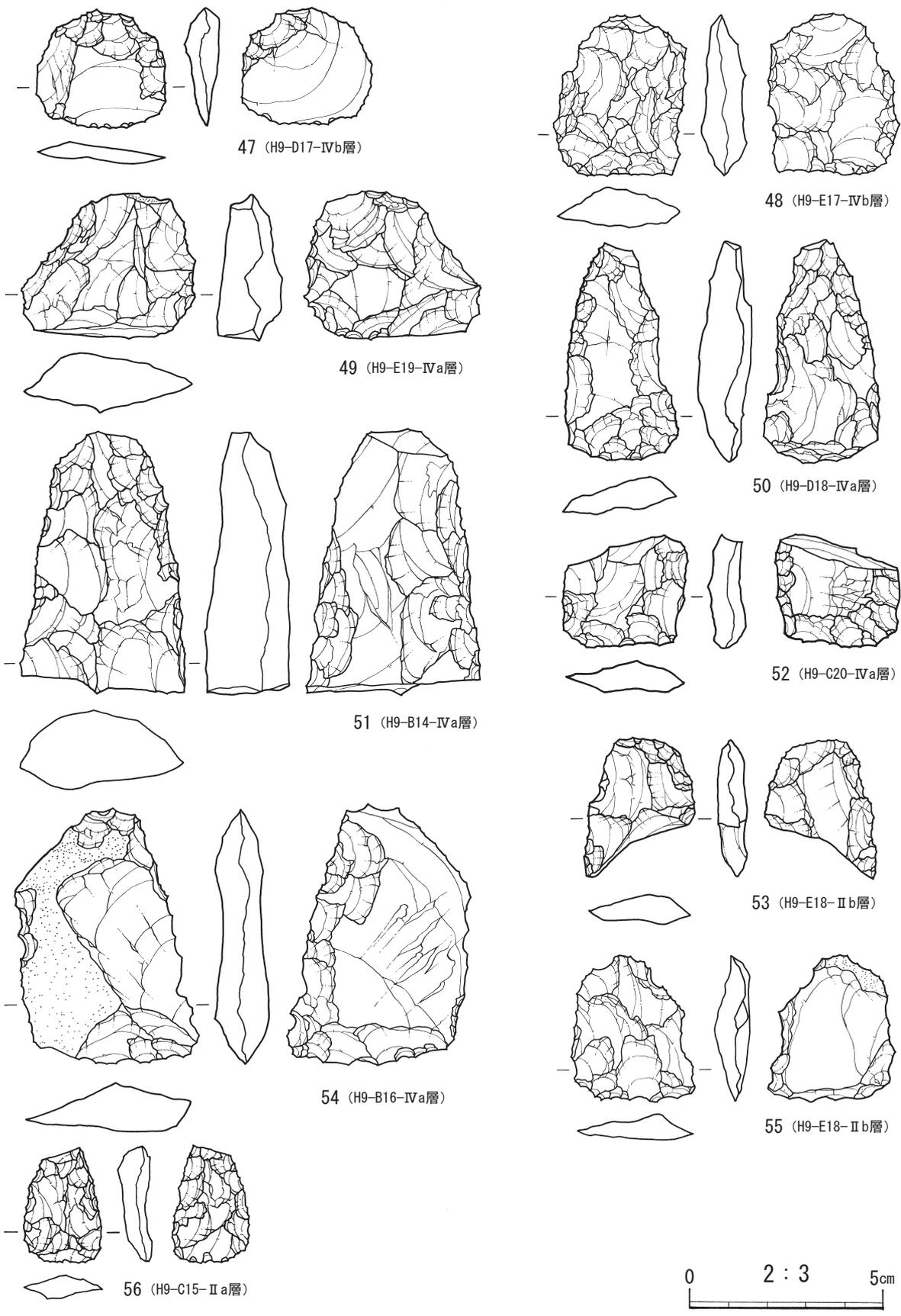
第 29 図 遺物包含層出土石器 (1)



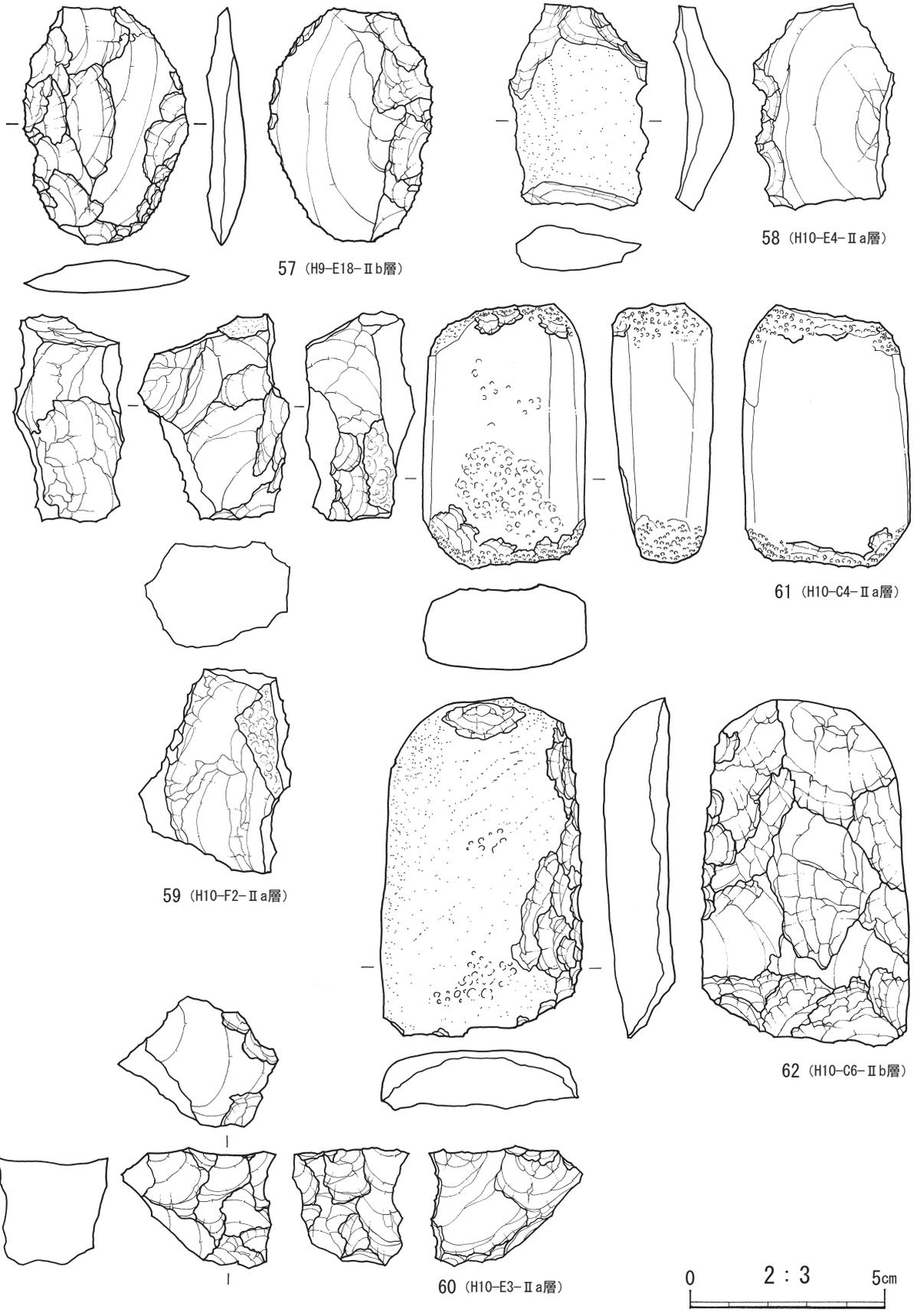
第30図 遺物包含層出土石器(2)



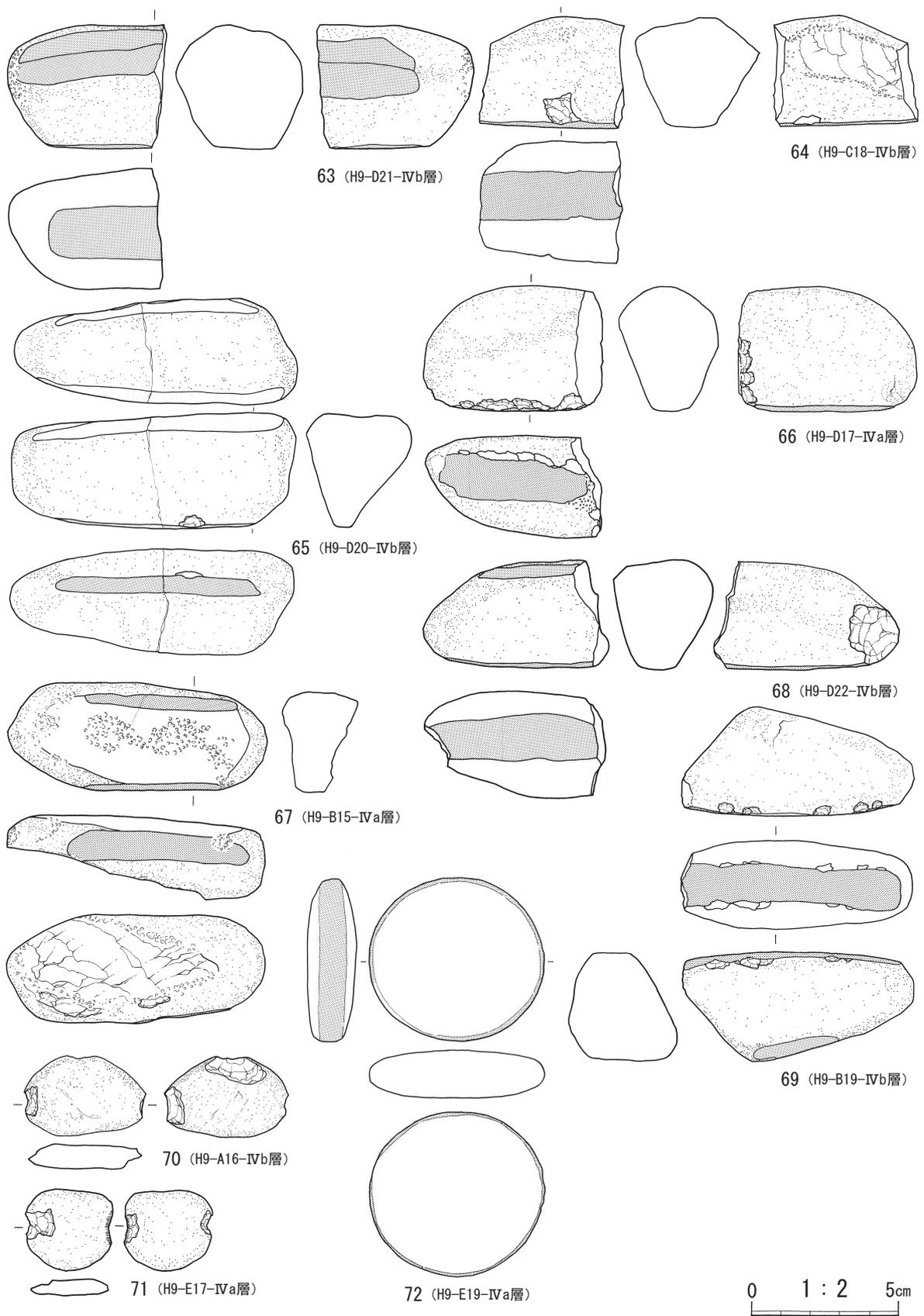
第31図 遺物包含層出土石器(3)



第 32 図 遺物包含層出土石器 (4)



第33図 遺物包含層出土石器(5)



第 34 図 遺物包含層出土石器 (6)

IV 総括

遺構 縄文時代前期初頭の竪穴建物跡が1棟(RA001竪穴建物跡), 縄文時代後期の土坑4基(RD003~006), 焼土遺構(炉)2基(RF008・009), 配石1基(RH001)が検出された。

RA001竪穴建物跡は標高値の高い調査区東部より発見され, 出土した土器から縄文時代前期初頭(約6,000年前)の構築と思われる。これまで当該期の遺構等は未確認であったが, 今回の調査で遺跡北東部の高地に住居域が存在していることが想定された。

縄文時代後期(約4,000年前)の遺構は調査区南東部に集中する傾向が見られた。発見された遺構は, 配石を伴う土坑(RD003・004)や配石(RH001), 屋外炉(RF008・009)など日常生活と異なる祭祀的な土地利用を思わせるものであった。RH001配石の大部分は後世の攪乱で失われていたが, 残存する配石が弧状で, 失われた延長部を考えると小規模な環状列石であった可能性がある。

遺物 今回の調査では最下層のV層より早期前葉の押型文土器を主とする遺物, 上位のIVa・b層より早期中葉の撚糸文土器を主とする遺物が若干の上下はあるものの層位的に出土した。また, III層とした礫層より上位のIIb層からは早期後葉(約7,000年前), 前期初頭の遺物, IIa層からは後期の遺物が層位的に出土した。

特筆されるのは, 早期中葉(約8,000年前)の蛇王洞II式に類似する撚糸文土器が多量に出土したことであろう。蛇王洞II式は, 昭和38年東北大学によって調査された岩手県住田町蛇王洞洞穴遺跡出土土器を標式とする早期中葉の尖底深鉢形土器である。特徴は口唇部に刻目, 口縁部に沈線による格子目文・幾何学文の文様, 体部には撚糸文を横位に施す特徴的な土器である。しかし, 蛇王洞洞穴遺跡以外からの出土例が少なく, 全体像が不明確な土器群であった。

今回の調査で出土した蛇王洞II式土器(II群土器)は器形, 文様種類・構成が把握できる量であり, 蛇王洞II式土器の内容を補強するするうえで重要な成果であった。また, 第13図66のように沈線による「帯状格子目文」が体部に大きく描かれる土器がある。この文様は, 関東地方から東北地方南部にかけて広く分布する土器に特徴的な文様であることから, 東日本を視野にした広域土器編年を考える上で重要な資料となるだろう。

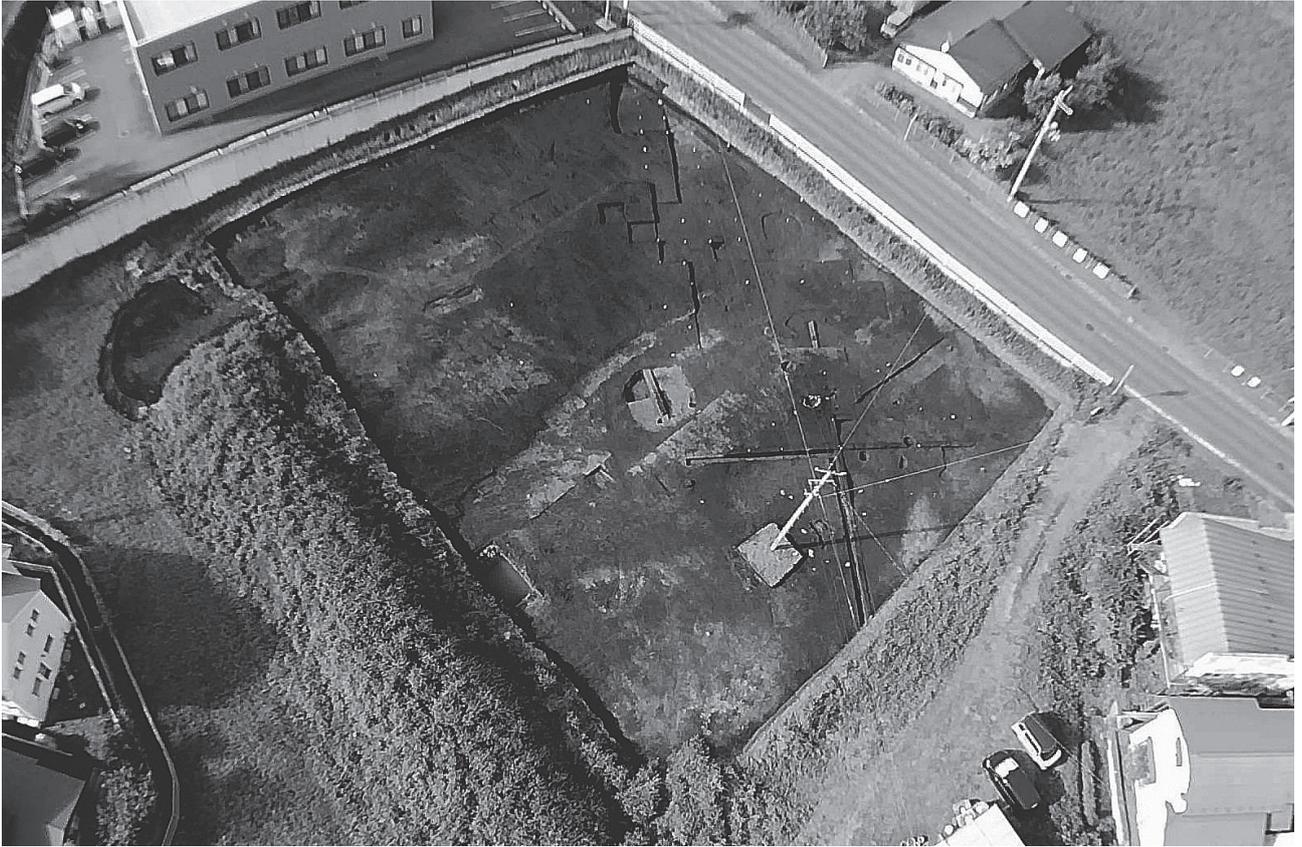
引用・参考文献

- 1965 芹沢長介, 林謙作「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代1号
- 1969 武田良夫「盛岡市上堤頭、小屋塚遺跡の押型文土器」考古学ジャーナル36
- 1969 菊池強一「瓢箪穴遺跡」岩泉町教育委員会
- 1970 武田良夫・吉田義昭「大新遺跡」奥羽史談69-2
- 1971 菊池強一「竜泉洞新洞遺跡発掘調査報告」岩泉町教育委員会
- 1982 武田良夫「岩手県における押型文土器文化の様相」赤い本創刊号
- 1982 馬目順一「竹之内遺跡—縄文時代早期の調査—」福島県いわき市教育委員会
- 1982 岩手県立博物館「岩手の土器—県内出土資料の集成—」
- 1982 名久井文明「貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- 1988 長尾正義「根井沼(1)遺跡」三沢市教育委員会
- 1989 名久井文明「東北地方北部における縄文時代早期貝殻腹縁文土器の系統」第4回縄文文化検討会
- 1991 鈴木良一他「前原A遺跡」福島県教育委員会
- 1992 青森県教育委員会「中野平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
- 1997 岡本東三「関東・北の沈線紋と関・東北押型紋—三戸式土器と日計式土器の編年的関係—」『人間・遺跡・遺物3』
- 2005 縄文セミナーの会「早期中葉の再検討」縄文セミナー
- 2006 海峡土器編年研究会「第4回縄文時代早期中葉土器群の再検討—資料集—」
- 2008 滝沢村埋蔵文化財センター「仏沢Ⅲ遺跡—平成2年度発掘調査報告書—」

盛岡市刊行分

- 1967 草間俊一・吉田義昭・武田良夫「一本松熊の沢遺跡調査報告」盛岡市公民館
- 1983 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大新町遺跡—」昭和57年度発掘調査概報
- 1986 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大新町遺跡—」昭和60年度発掘調査概報
- 1987 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大新町遺跡—」昭和61年度発掘調査概報
- 1989 盛岡市教育委員会「上平遺跡群—猪去館遺跡—」昭和63年度発掘調査概報
- 1990 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大新町遺跡—」平成元年度発掘調査概報
- 1995 盛岡市教育委員会「上平遺跡群—猪去館・上平Ⅱ遺跡—」平成4・5年度発掘調査概報
- 1997 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大館町遺跡—」平成6・7年度発掘調査概報
- 1998 盛岡市教育委員会「大館遺跡群—大館町・大新町遺跡—」平成8・9年度発掘調査概報
- 2000 盛岡市教育委員会「盛岡市内遺跡群—屠牛場遺跡—」平成11年度発掘調査概報
- 2001 盛岡市教育委員会「盛岡市内遺跡群—大新町遺跡—」平成12年度発掘調査概報
- 2002 盛岡市教育委員会「盛岡市内遺跡群—宿田遺跡—」平成13年度発掘調査概報
- 2008 盛岡市教育委員会・宮城開発株式会社「薬師社脇遺跡—一宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—」
- 2008 盛岡市教育委員会「昼久保Ⅴ遺跡—一般国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書—」
- 2014 盛岡市教育委員会「新茶屋遺跡—盛岡中央消防署山岸出張所庁舎建設に伴う発掘調査報告—」

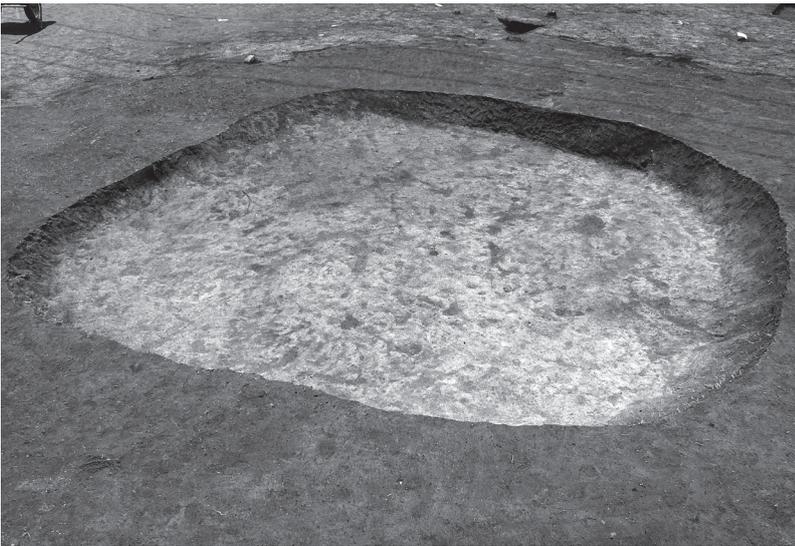
写真図版



調査区全景 1



調査区全景 2



RA001 竪穴建物跡全景



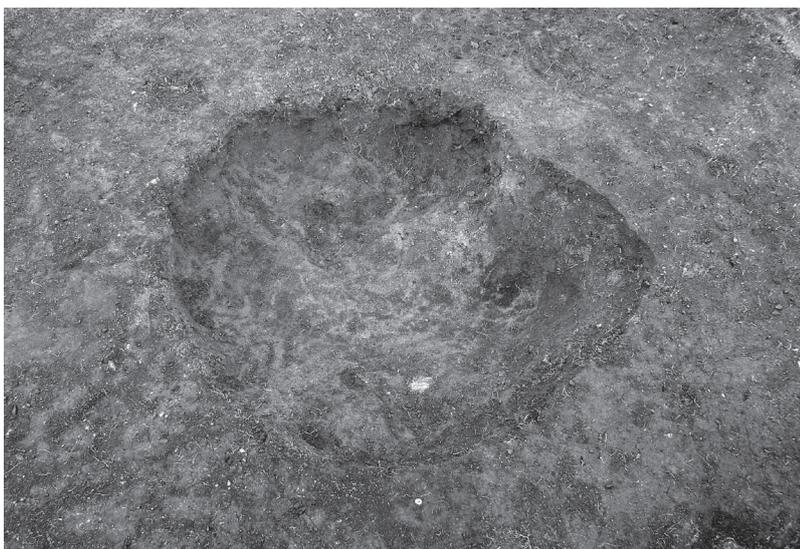
RA001 竪穴建物跡土層堆積状況



RD003 土坑全景



RD004土坑全景



RD005土坑全景



RD006土坑全景



RF008 焼土全景



RF008 焼土埋設土器



RF009 石囲炉全景



R F 0 0 9 石 罌 炉 埋 設 土 器



R H 0 0 1 配 石 全 景



R H 0 0 1 配 石 検 出 状 況



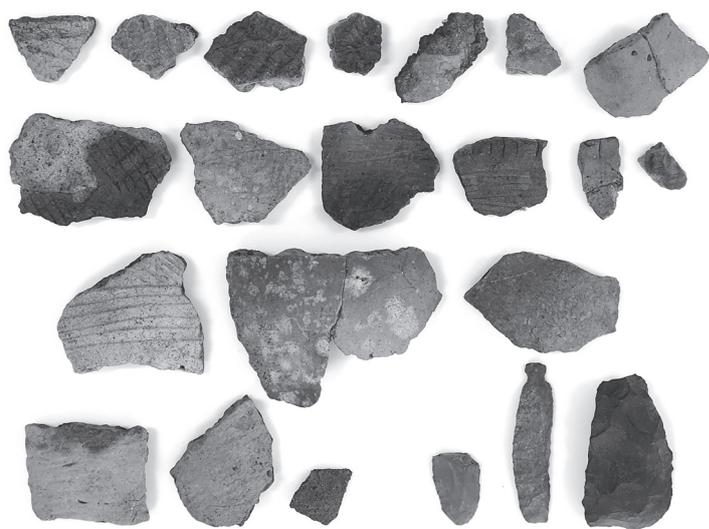
調査区北東壁土層堆積状況



遺物包含層（IV b 層）遺物出土状況



IV b 層 早期土器尖底部出土状況



RA001 竖穴建物跡出土遺物



RD003・005土坑
RF009石罏炉,
RH001配石出土遺物



RF008 烧土遺構出土遺物



RF009 石罏炉出土遺物



RH001 配石遺構出土遺物



遺物包含層出土遺物（1）



遺物包含層出土遺物（2）



遺物包含層出土遺物（3）



遺物包含層出土遺物（4）



遺物包含層出土遺物（5）



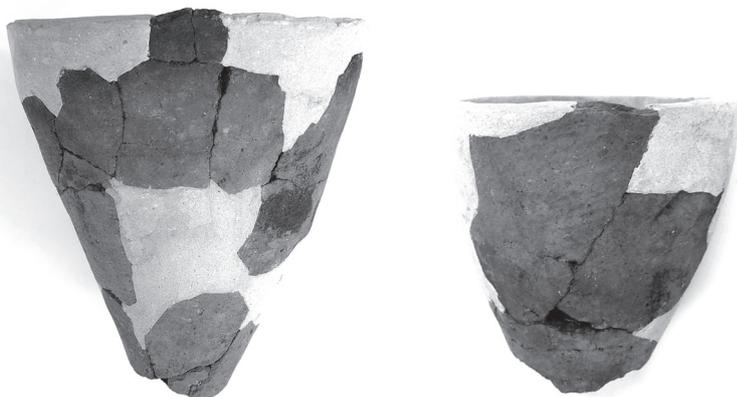
遺物包含層出土遺物（6）



遺物包含層出土遺物 (7)



遺物包含層出土遺物 (8)



遺物包含層出土遺物 (9)



遺物包含層出土遺物 (10)



遺物包含層出土遺物 (11)



遺物包含層出土遺物 (12)



遺物包含層出土遺物 (13)



遺物包含層出土遺物 (14)



遺物包含層出土遺物 (15)



遺物包含層出土遺物 (16)



遺物包含層出土遺物 (17)



遺物包含層出土遺物 (18)



遺物包含層出土遺物 (19)



遺物包含層出土遺物 (20)



遺物包含層出土遺物 (21)



遺物包含層出土遺物 (22)



遺物包含層出土遺物 (23)



遺物包含層出土遺物 (24)



遺物包含層出土遺物 (25)



遺物包含層出土遺物 (26)



遺物包含層出土遺物 (27)

報告書抄録

ふりがな	しんちゃやいせき							
書名	新茶屋遺跡							
副書名	宅地造成工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	神原雄一郎, 今松佑太, 鈴木俊輝							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	合同会社NEXT・FUTURE, 盛岡市教育委員会							
発行年月日	2022年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
しんちゃやいせき 新茶屋遺跡 第6次	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 やまぎしろくちようめ 山岸六丁目46 番1外	03201	LE07-0143	39° 43' 39"	141° 10' 20"	2021.06.01 ～ 2021.08.31	2,019 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新茶屋遺跡	散布地	縄文時代	竪穴建物跡 土坑 焼土(炉跡) 配石	1棟 4基 2基 1基	縄文時代早期～後 期・弥生時代の土 器, 石器			
要約	岩手県内でも出土例の少ない縄文時代早期前葉・中葉の土器が出土した。特に早期中葉とした土器群は所謂「蛇玉洞Ⅱ式」といわれる土器で、文様構成がわかる土器が多量に出土したことが特筆される。文様には、関東地方で特徴的な沈線文や、北東北で特徴的な刺突文が含まれており、土器文化の地方色を知る上で重要な資料を得ることができた。							

新茶屋遺跡

宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

2022年3月31日発行

- 編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600
- 発行 合同会社NEXT・FUTURE
〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原三丁目5番10号
TEL 019-653-2345
盛岡市教育委員会
〒020-8532 岩手県盛岡市津志田第14地割37番地2番地1
TEL 019-651-4111
- 印刷 株式会社阿部印刷
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2番2号
TEL 019-624-2242